



病院再開発に伴い外観も新しくなった香川大学医学部附属病院（関連記事 P18）

讃 樹 會

令和元年9月1日発行

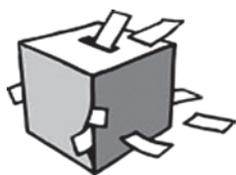
CONTENTS

- 02 会長選挙・理事選挙告示
- 03 同窓生教授就任挨拶
- 05 寄稿 金西賢治教授就任祝賀会参加報告
- 06 医学部教授退官挨拶
- 08 同窓生News
- 13 理事会議事録
- 14 平成30年度会計報告
- 15 令和元年度予算
- 16 令和元年度研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 17 国外留学助成金受賞の言葉
- 17 ニュースの窓
- 18 特集1 病院再開発整備事業の完了について
- 22 特集2 平成元年に生まれて
- 26 関連病院紹介【さぬき市民病院】
- 29 書籍紹介
- 30 国外留学助成金 留学レポート
- 32 趣味ごんまい
- 34 創部ものがたり【スキー部】
- 36 追悼
- 39 教授の横顔
- 42 教室便り
- 52 学会開催報告
- 54 Album (34期生)
- 56 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 佐藤 清人
編集人 谷 文二
印刷所 株式会社





令和2年度・令和3年度同窓会長及び理事 選挙告示

選挙管理委員会 委員長
植村 信久

同窓会長選挙

令和2年3月の任期満了に伴い同窓会会長の選挙告示を行います。
同窓会会長選挙規定第5条をご確認の上立候補される会員の方は令和元年12月20日までに事務局までご連絡下さい。但し、立候補者一人の場合は信任投票となります。

同窓会選挙規定

第5条 会長選挙立候補者の所信表明開示

- 1 会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。
- 2 会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも5名の推薦人氏名を公開しなければならない。

同窓会理事選挙

現在の理事は、令和2年3月に任期満了となりますので、会則9条及び会則25条にもとづき、選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の推薦をお願いします。

理事選挙の流れ

① 【理事候補の推薦】

9月に、理事推薦用紙をお送りします。
同期で適任と思われる方の名前を、最多で4名まで記入し11月末日までに返送してください。
立候補もお待ちしています。

同期で適任と思われる方の名前を、最多で4名まで推薦して下さい。

締切11月末日

② 【理事信任投票】

推薦が出揃いましたら、理事候補一覧を作成し、翌年の2月にお手元にお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

◆ 会長選挙及び理事選挙 タイムスケジュール ◆

2019年9月	10月	11月	12月	2020年1月	2月	3月	4月	総会開催月
告示		理事推薦・立候補 返信締切 (末日)	会長立候補 締切 (20日)		会長選挙 理事選挙	投票		投票締切

会則及び同窓会選挙規定は讃樹會HPを参照下さい。 ➡ (<https://dousoukai.site/sanjukai/kaisoku/>)

今期の執行部、理事名につきましては、同封の一覧又は、讃樹會HPを参照下さい。

➡ (<https://dousoukai.site/sanjukai/yakuin/>)

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

これまでの産婦人科診療と今後の展望

香川大学医学部母子科学講座周産期学婦人科学 教授

金西 賢治 (平成5年卒・8期生)



平成31年4月1日付けで香川大学医学部母子科学講座周産期学婦人科学教授を拝命いたしました。香川大学医学部讃樹會の会員の先生方にこの場をお借りしご挨拶を申し上げます。ご存知のように当教室は昭和55年に全国に先駆け前身である周産(生)期学と婦人科学の2講座を合わせた母子科学講座として大講座制で開設されました。初代の教授を務められましたのはそれぞれ神保利春教授、半藤保教授でした。平成10年に周産(生)期学講座の2代目教授として秦利之教授が就任し、平成13年から2講座を統一し周産期学婦人科学講座とし新たな体制となり、今回私で3代目となります。当教室の理念として24時間体制で母体および新生児搬送を可能な限り受け入れ、母体、胎児および新生児を総合的に管理、治療を行うことを掲げ診療を行ってきました。産婦人科と小児科が常に密な連携を持ち、高度な知識と技術を持つスタッフによる出生前診断、胎児治療、周産期管理を行える診療体制を維持しています。平成17年に総合周産期母子医療センターとして全国で2番目に認可され、それまで以上に東讃を中心とした香川県の地域医療に大きな役割を果たしてきています。地域の診療所と密な連携体制をとっていくことが、最近の香川県における周産期死亡率が全国平均から見ても低い水準を維持している結果につながっていると考えます(2015年の周産期死亡率は2.2人と全国でもっとも低い値)。何らかの異常が考えられる胎児を出産後ではなく、出生前から管理し、分娩後も母児共に一貫してケアを行うことが低い周産期死亡率を維持できてきた要因の一つと考えます。これは当教室が開学から掲げている妊婦、子どもに妊娠期から成人期までの切れ目のない医療や福祉を提供することがいかに重要であるかを示しており、このことは最近成立した生育基本法(平成30年12月8日)が目指している基本理念とも一致し、我々の行なっている診療姿勢が時勢と一致してきた結果と感じています。また、当教室の伝統として経陰分娩をより安全に管理することが挙げられます。近年、全国的に見ても帝王切開率は上昇傾向にあり、当院でも2012年は16.7%であった帝王切開率が2015年には21.9%と増加していますが、総合周産期母子医療センターを有する高次医療機関のなかで比較すると低い水準を維持しています。これは急速遂術に積極的に鉗子分娩を取り入れ、また骨盤位経陰分娩、双胎妊娠での経陰分娩および帝王切開既往の経陰分娩も行い、失われつつある産科技術を次の世代に継承し、教育するよう努力している結果と考えられています。低リスクの正常経陰分娩においても、陣発入院後の分娩進行を常に注意し、全ての妊婦に対し安全な分娩管理を行なえる医師の育成に努めています。しかしながら、地方の周産期医療はまさに変革の時代

に入ったといえます。地域の産婦人科医の減少や働き方改革の影響などからますます厳しい状況になることが予測されます。産婦人科医師の偏在により、人口過疎地域の分娩は周産母子センターなどへの集約化がすすみ、全ての妊婦にとってどこでも安心して分娩ができる環境は減ってきています。将来的に地域に子供達がいらない社会は人口減少だけではなく地域経済の衰退や医療資源全体の衰退にもつながるとも考えられます。地方創生を掲げる時代だからこそ地域住民が安心して出産、育児を行える環境を守ることが大切であり、そこでの我々の役割は今後尚一層重要なものになると考えます。

医学教育、研究についてはグローバル化する医学界に対応でき、世界に研究成果や情報を発信できる専門性の高い知識や技術を習得した医師の育成を心がけたいと考えます。全国的に減少している産婦人科医全体の増加にも貢献できるよう努力して行きたいと考えています。先代の秦教授のもと、二次元(2D)超音波診断法による胎児出生前診断に加え、三次元超音波(3D)画像診断法や各種ドプラ法を追加することにより、より正確な診断法の確立にむけ研究を行ってきました。また、日々進歩する最新の超音波技術を用いた胎児異常の出生前診断、胎児発育の新しい評価法、胎児臓器体積計測法なども検討しています。最近では、世界でも類を見ない4D超音波法による胎児行動学に関する研究において、多くの成果を発表しています。このような胎児期の表情や行動を検討することで将来的に行動学的な観点から、胎児の神経疾患や発達障害などの早期診断や治療に寄与できるものと考えています。

香川大学医学部は産婦人科と小児科が常に有機的に連携、協力し合える環境が整っており、これは全国的にも珍しく我々の施設の特徴と考えます。この特徴を生かし、今後も地域の周産期・新生児スタッフの意識向上、教育などにも貢献し、香川の周産期医療の発展に尽力していく所存です。

略歴

平成5年3月 香川医科大学医学部医学科卒業
 平成5年5月 香川医科大学医学部附属病院医員(研修医)(産婦人科)
 平成8年4月 香川医科大学医学部大学院医学系研究科入学
 平成13年3月 同上 修了、博士号取得
 平成13年4月 香川医科大学医学部附属病院医員(産科婦人科)
 平成13年10月 香川医科大学医学部附属病院助手(産科婦人科)
 平成16年1月~4月 癌研究会癌研究所実験病理部
 平成17年12月 香川大学医学部学内講師(周産期学婦人科学)
 平成23年4月 香川大学医学部附属病院講師(周産期科女性診療科)
 平成24年10月 香川大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター准教授
 平成31年4月 香川大学医学部母子科学講座周産期学婦人科学教授

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

「病理研究者として」



香川大学医学部腫瘍病理学 教授

松田 陽子 (平成10年卒・13期生)

このたび今井田克己先生のあとを引き継ぎ平成31年4月1日付けで香川大学医学部腫瘍病理学教室の教授を拝命しました松田陽子です。どうぞよろしくお願い申し上げます。今回、香川大学医学部医学科同窓会報誌上で就任のご挨拶をさせていただく運びになりましたことは大変光栄に存じます。

私は香川大学医学部(旧、香川医科大学)に13期生として入学しました。基礎配属で炎症病理学教室(旧、第二病理学、阪本晴彦教授)に参り、その後卒業までの間、同級生と病理学教室に通うようになりました。いつでも病理の診断や研究を学ぶことのできる自由で温かい雰囲気が病理学教室にあり、とても楽しかった思い出です。

学生時代は友人に何度も助けられました。私が卒業試験の日時を間違え、坂出の自宅でテレビを見ている時に友人から電話があり、急いで大学に行っていると国分寺でスピード違反のため捕まり、それでもなんとか試験時間残り数分というところで大学に辿り着いて試験を受けたこともありました。このことは今でも悪夢に見ます。

卒業後は香川大学循環器・腎臓・脳卒中内科学(旧、第二内科、松尾裕英教授)に入局し、マイペースの橋本真由子先生、全力投球の清元秀泰先生、諦めない高橋則尋先生らをはじめ、多くの個性的な先生方にご指導いただきました。研究発表や学位取得の際に、先生方からお褒めの言葉をいただき、研究が向いていると仰っていただいたことが、研究を続けるようになったきっかけです。

腫瘍病理学教室に移ってからは、今井田克己教授から地道な研究を、竿尾光佑先生(現、回生病院)から真摯に向き合って病理診断することを教わりました。私は香川県で生まれ育ち一生香川県にいたいと思っておりましたが、結婚、夫の転勤をきっかけに、東京の日本医科大学、東京都健康長寿医療センターに移りました。そこでも、様々なバックグラウンドの先生方とお会いでき、多くのことを学びました。田久保海督先生は研究業績重視、新井富生先生は協調性重視、石渡俊行先生は計画性重視、といった異なるタイプの先生方が、力を尽くして癌研究をされており、大きな影響を受けました。それまでの私は与えられた仕事をするのしか考えが及びませんでした。癌研究を行っているうちに、病理医としての知識や経験に基づいた研究の楽しさを知り、病理研究者として歩もうと決めました。また、がん研有明病院での週半日の研修や、アメリカ短期留学の機会までいただくことができました。アメリカ留学は单身のため心細かったですが、ハーバード大学の三野Kenudson真里教授が多度津のご出身で、同郷のよしみで私の面倒を見てくれ、その後も一緒

に研究をすることになりました。順天堂大学の福村由紀准教授も観音寺ご出身ということで、共同研究を行うこととなり、香川県民の繋がりの強さを実感しました。

これまでの多くの出会いや経験から学んだことは、当たり前のことですが、自分を認識することが大切だということです。香川、東京、アメリカとどこにいても、何をやっても、自分のやり方でしか物事を進められないし、結局はいつも同じようなことをやっているということに、最近になって気付きました。また、これも当たり前ですが、人との繋がりが大切だということです。私は人付き合いが苦手のため、人脈作りは無理だと諦めていましたが、仕事を通して多くの方々との出会い、一緒に何かを成し遂げ、その結果として多くの方々との繋がりが得ることができました。人生が豊かになるというのは、こういうことだったのかと、やっと理解できてきたように思います。研究では、努力や能力は無関係で結果だけが評価されるため、辛いことや難しいことがたくさんあります。いつも感じるのは、研究では△は無く、○×だけです。その苦しさを共有した人とは、信頼関係に基づいた強い繋がりが得ることができたと思います。

今後は、多くの方々からいただいたご恩を少しでも返せるよう、腫瘍病理学教室のさらなる発展のため、力を尽くしていきたいと考えています。今日でちょうど着任後2カ月となり、少し香川大学に慣れてきたところです。現在の私の研究テーマは「膵臓癌」と「加齢」です。病理形態学に基づいた研究は、生体内の変化を正確に捉えられ、また、臨床医学に結び付けやすいという利点があると考えています。臓器や分野に関わらず、腫瘍に関連する研究について、他教室の先生方や学生、研究生、大学院生の方々と一緒に進めさせていただければと思いますので、ご興味のある方はお気軽にお声をおかけいただければ幸いです。讃樹會の皆様のご指導をいただきながら、研究を通して香川大学の発展や後進の育成に尽力して参りたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

略歴

平成4年3月	香川県立坂出高校普通科 卒業
平成4年4月	香川医科大学医学部医学科 入学
平成10年3月	香川医科大学医学部医学科 卒業
平成10年4月	香川医科大学大学院医学系研究科 入学
平成14年3月	香川医科大学大学院医学系研究科 修了
平成14年4月	香川医科大学医学部医学科研究生(平成15年6月まで)
平成27年10月	Department of Pathology, Massachusetts General Hospital, Observer fellow(平成27年11月まで、東京都健康長寿医療センター、長期出張)
平成31年4月	香川大学医学部腫瘍病理学 教授

《寄稿》 金西賢治教授就任祝賀会参加報告 金西賢治先生教授就任記念祝賀会に参加して

讃樹會名誉会長

濱本龍七郎（昭和61年卒・1期生）

令和元年6月8日（土）、金西賢治先生香川大学医学部周産期学婦人科学教授就任記念祝賀会が、高松市AMANDAN CALM (A.C)にて開催され、私（濱本）が参加いたしましたのでご報告申し上げます。

金西教授の晴れ舞台にふさわしく快晴のA.Cから見渡せる瀬戸の海は和やかで誠に夢舞台であり、県内外の医療関係者を含むおよそ100名の皆様がお集まりでした。

祝賀会は香川大学医学部周産期学婦人科学学内講師の森信博先生の司会進行で始まり、ご来賓によるお祝いの挨拶がありました。この春退官された周産期学婦人科学元教授泰利之香川大学名誉教授から、研究・臨床・教育の各方面における金西先生の素晴らしさと人柄の良さが伝えられ、次に初代教授である神保利春香川大学名誉教授は出会った当時から、今日まで成長することを予測していた、愛弟子であり心より嬉しく思っていると祝辞を述べられました。私個人としましては、21年振りに神保先生にお会いしました。学位論文の主査でありました神保先生には心より感謝しています。続いて日下隆小児科学教授から、弟のような存在であり母校のために頑張ってきた人が母校の教授になられたことを大変誇らしく思い、周産期死亡率が全国で最も低い（つまり過去5年間の平均で世界で最も低い）香川県の母子周産期医療をこれからも一緒に支えていきたいとのお挨拶があり、香川県医師会長久米川啓先生による乾杯の後、祝宴となりました。

ぐるりを囲む青い海にピアノ演奏や、有志によるアカペラの唄声流れ、賑やかに会話も弾む中、ご来賓として、阪本晴彦香川大学名誉教授、佐々木睦子香川

大学副医学部長から祝賀の挨拶がありました。

記念品と花束の贈呈の後、金西賢治教授から謝辞がありました。香川大学出身で、地域医療と共にこの香川県で成長させていただいた。香川県の周産期医療は全国的にも高い水準を維持しており、これは、小児科学との連携が非常にうまくいっているおかげである。これまでの教室の伝統を守りつつ、若い産婦人科医の人材育成に努め、香川の医療を支えていくことを使命として尽力したいと述べられ、職場結婚である御令室様の内助の功を労われ、これからも人との出会いを大切にしていきたいと挨拶を結ばれました。

最後に、香川大学医学部周産期学婦人科学同門会副会長大西洋一先生による中締めがあり閉会となりました。金西先生の益々の御活躍を心よりお祈り申し上げます。



医学部教授退官挨拶

18年間お世話になった香川大学医学部教授を退職して



香川大学 理事・副学長

今井田克己

私は2019年1月21日に「病理学と歩んだ38年 - 化学発がん研究とリスク評価 -」と題した最終講義をさせていただき、2001年から18年間お世話になった香川大学医学部教授を3月末で退職いたしました。

私は医学部学生5年次生の時に、突然の咯血から、結核に罹患していることが分かり、365日間入院し、ストレプトマイシン、イソニアジド、PASの3者併用療法を受けて、1年間の療養生活を過ごしましたが、幸い1年後に退院し、復学することができましたが、この経験は後に学務委員長や医学部長の時に、学生の留年の指導に関係して大いに活かすことができたと思います。退院直後の体力では臨床医になってもすぐに限界が来るような気がして、病理学の大学院に進み、私のがん研究者として、そして、病理医としてスタートしたわけです。私の最初の研究論文を英文で書いて投稿し、それが受理されたという手紙を、国際郵便として受け取った時は本当にうれしかったです。そして、アメリカミシガン州のデトロイトにあるMichigan Cancer Foundation (MCF) に留学しました。そこでの環境物質の化学発がんの研究は順調に進み、結局、12編の論文として発表することができました。そして、帰国後、東京の国立衛生研究所に赴任し、発がん中心の研究のほか、厚生労働省の委員会の委員も兼ね、行政に関して専門家として参画することになりました。その後、厚生労働省だけでなく、経済産業省、総務省、内閣府などの行政の場で安全性のリスク評価に関する各種委員につながっていくことになりました。医薬品や農薬、食品添加物など各種化学物質、そして電磁波などによるヒト健康有害性の評価、いわゆる「リスクアセスメント」の評価委員として、現在に至るまで継続して活躍の場を与えていただきました。

大学での研究を続けながら、関連する病院・施設である名古屋市厚生院、そして、名古屋市立東市民病院（現名古屋市立東部医療センター）にそれぞれ約3年間ずつ、病理医として勤務し、多くの生検病理診断、細胞診に病理解剖を経験できました。そして、2001年9月に香川医科大学第一病理学（現在の香川大学医学部腫瘍病理学）に教授として赴任しました。香川大学での私の代表的な研究として肺発がんの研究があり、4-(methylnitrosamino)-1-(3-pyridyl)-1-butanone (NNK) を用いた動物発がんモデルを確立し、そのモデルを用いて肺発がんの発生過程の研究やがん予防物質を探索する研究を行うことができました。さらに、薬物代謝酵素のひとつであるCYP2A6の肺発がん発生過程における関与を研究し、CYP2A6の酵素作用

を阻害する物質を投与したマウスにはNNK誘発肺発がんを抑制することを明らかにしました。

また、疾患モデル動物による化学物質の有害性リスク評価を内閣府の食品安全委員会の研究班として、糖尿病、高脂血症、高血圧の疾患モデル動物を用いて、医薬品や食品の成分で有害性を示さない用量（無毒性量）を確定し、その無毒性量にモデル動物間で違いがあるのかどうかを検討した結果、生活習慣病のモデル動物でも特に差は無い、という結論を出すことができました。

また、アスベストに近い形状と組成のカーボンナノチューブの有害性について、厚生労働省の研究班の班長として研究を進めることができました。さらに、電磁波の発がん性評価に関連して、総務省を中心とした電磁環境による健康有害性評価に関する委員会の委員として、複数の委員会に参画することになり、この分野でも社会貢献することができました。このことは私が高校生の時に取得した資格、「無線従事者免許証」を取得していわゆるアマチュア無線をやっていたことと関係があったのかもしれませんが。このような趣味が将来思わぬところで結びつくものですし、この年齢になってもその分野でも自分の活躍の場があることは誠に幸せなことだと思っています。

食品安全委員会が内閣府に設立された直後から専門委員として、食品添加物専門調査会、農薬専門調査会、そして遺伝子組換え食品等専門調査会の専門委員となり、特に、食品添加物専門調査会には、12年間委員をさせていただき、2009年10月から、2期の4年間はその専門調査会の座長となり、私が座長を務めた4年間で48品目の評価書をまとめることができました。これら委員会に参加するため定期的に、そして頻繁に飛行機で東京に出張するようになり、私の搭乗回数が1000回を超えたとの連絡が航空会社からありました。香川大学では皆様に支えられて医学部長を2期させていただきました。ちょうど大学改革の一環として、2018年4月に、国立大学医学部では全国で最初となる臨床心理学科が設置されたことは誠に喜ばしいことです。

私は香川大学医学部そして讃樹會の皆様の実に恵まれた環境で教育、研究、そして社会貢献をさせていただいたと思っています。無事定年退職を迎えられるのも皆様の支えがあつてのことです。2019年4月からは、香川大学本部で教育担当の理事・副学長として、引き続き香川大学に貢献できればと思っています。私を支えていただいたすべての方々から感謝して、退職のご挨拶とさせていただきます。

医学部教授退官挨拶

讃岐の丘にて21年間

本年3月をもって香川大学（旧香川医科大学）を退職いたしました。1998年4月に香川大学（旧香川医科大学）に赴任し、21年間、同窓会の先生方には大変お世話になり本当にありがとうございました。振り返ってみますと、ぼくが赴任した1998年の医大附属病院の分娩数は246件で、昨年の分娩数は700件と初の大台に乗り、開院以来の最高の分娩数を記録しました。これも同窓会の先生方のご協力とご支援の賜物と感謝しています。また、入院患者の数も、赴任時は1日35～40人くらいであったのが、一番多かったときには1日70人で1階から7階まで階段で回診したことが懐かしく思い出されます。最近では、1日60人前後で病床稼働率は100%を超えています。これもすべて産婦人科スタッフの日頃の努力の賜物と改めてお礼と感謝の意を述べさせていただきます。

研究面では、ぼくのライフワークであります産婦人科超音波診断を発展させることができ、3D/4D超音波、出生前診断、新しい胎盤機能評価法、胎児行動学などで世界のトップジャーナルに多数の論文を掲載することができました。特に胎児行動学では、文科省の新学術研究、理化学研究所との共同研究などの大型

香川大学名誉教授

秦 利之



研究プロジェクトに参加することができ、今後周産期学婦人科学講座の研究の柱の一つとして発展し、香川大学が胎児・新生児の脳研究のメッカとなってくれるものと確信しています。また、日本で唯一の施設として、胎児期神経学的評価法であるKANETテストを臨床で行なっています。

一つ心残りなこととして、香川県の産婦人科医の数が、1998年が131名、2019年が108名とその減少に歯止めをかけることができなかったことです。香川大学の産婦人科も新入局者の確保に難渋し、一昨年の4月から新しい試みを始め、それまで5～6名であった6年生のスーパーポリクリが昨年は14名、今年は24名に増加し、数年後には新しい入局者が増えてくれることを心から期待しています。是非、同窓会の先生方にも香川県の産婦人科医増加に向けてご支援、ご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。

最後に、香川大学医学部同窓会のさらなる発展と、同窓会の先生方のますますのご健勝を祈念し筆を置かせていただきます。長い間本当にありがとうございました。



同窓生News

西山成先生(8期生):宇宙を舞台に生命の謎に挑む!

JAXAと共同研究へ

香川大学医学部薬理学 教授

西山 成 (平成5年卒・8期生)

はじめに

香川大学医学部医学科同窓会・讃樹會会員の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。また、この度は、讃樹會会報にJAXAと共同研究契約を締結しましたことを報告する機会をいただきまして、誠にありがとうございます。2019年は、本学薬理学を担当してから12年の節目でございますので、紙面をお借りし、教室の研究方針も含めて報告させていただきます。

1. 教室の研究方針

香川大学医学部・薬理学講座は私も含め教員が2-3名の小さな教室ですが、「多くの仲間と一緒に、世界最先端の社会貢献につながる研究を続けていくことが我々の願いです」という研究理念のもと、各教員に対し、自分が思い描くキャリアパスを視野に入れて、世界最先端の研究にチャレンジすることを求めています。例えば、前・准教授であった人見浩史先生に対しては、山中伸弥先生が京都iPS細胞研究所を設立した直後から出向させました。その結果、Science Translational Medicine誌に素晴らしい成果を発表することができ、昨年、関西医科大学iPS細胞再生医学講座の主任教授となることができました。一方、現・准教授である中野大介先生には、海外に3度留学させ、国内で最初に腎臓のin vivoイメージング技術を確立させました。現在はこの技術を応用し、日本薬理学会研究奨励賞や日本腎臓学会大島賞を受賞されるなど、薬理学・腎臓学会のホープとして活躍されておられます。

これに対して私自身も全く別の研究プロジェクトを大学院生と実施しています。大きく分けて、「レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系」の研究と「体液循環制御解明」の2つの研究プロジェクトを進めております。レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の研究プロジェクトでは、生活習慣病の新薬開発に向けて企業と共同研究を実施するのみならず、AMEDプロジェクト(ACT-MS、創薬ブスター、橋渡しシーズA)のサポートのもと、癌に対する新規診断・治療法の開発を進めております。これらにつき

ましては、一日も早い臨床開発を目指し、トランスレーショナル・リサーチを展開しております。

もう一つの私の研究プロジェクトである「体液循環制御解明」の研究では、科研費基盤Bやソルトサイエンス財団プロジェクト研究などのサポートを受け、様々な遺伝子改変マウス・ラットを使用した実験から、イルカやヒトでの研究などを通じ、生命の維持に必須な「体液循環」の恒常性維持メカニズムを追求しています。その一部のプロジェクトが、この度、JAXAとの共同研究契約につながりましたので、以下に報告させていただきます。

2. JAXAとの共同研究について

大阪薬科大学から身一つで薬理学に大学院生として来てくれた北田研人先生は、院生のうちにNature Medicineをはじめとし、複数のトップ・ジャーナルに論文を発表し、現在は学術振興会の特別研究員としてシンガポールに留学しています。北田先生の留学先で最初のテーマとなったのが、ロシアの宇宙飛行士訓練プログラムの解析でした。ロシアは火星での宇宙開発を目指しており、火星への520日間にもおよぶ宇宙の飛行に耐えうるパイロットの訓練プログラムを続けています。それが、「MARS500」と呼ばれるもので、宇宙飛行士を数百日間同じ場所で生活させ、からだの変化を連続的にモニターするプロジェクトです。このデータの一部を北田先生が解析した結果、長期に渡って塩辛い物をたくさん食べた場合、予想に反して飲水量が有意に少なくなっていることを発見しました。

動物での確証実験とメタボローム解析により、塩の摂り過ぎが全身の「カタボリズム(異化)」を生じて尿素産生が増加させ、これが腎臓に蓄積して、水分の再吸収量が調節されていることが明らかとなりました。これは、肺魚やカタツムリが夏眠(aestivation)する際に生じるからだの変化として知られていることですが、これがヒトでも生じうるということを発見したものであり、世界中に大きな驚きを持って伝えられました。2017年のJournal of Clinical Investigationではもっとも読まれた論文として表彰され、タイム誌やニューヨークタイムズ誌でも特集が組まれました。その

後の研究により、皮膚のナトリウムイオンや水分が「カタボリズム」反応に非常に重要な役割を果たしていることがわかってきましたので、我々は皮膚のナトリウムイオンや水分を測定する方法を確立し、さらなる詳細なメカニズムを追求しているところであります。

今回、締結されましたJAXAとの共同研究契約ですが、国際宇宙ステーション（ISS）の日本実験棟「きぼう」で飼育されたマウスを使用し、低重力状態で生じる皮膚の金属元素や水分の変化を明らかとするものであります（図）。実験の詳細は秘密保持契約を締結しているためお話できませんが、先に述べました「ヒトも生じるカタボリズム反応における皮膚の役割」を解明し、宇宙空間で生じる浮腫などの病態解明、なら

びに新しい治療法の開発につなげたいと考えています。さらに、この共同研究を進めることにより、さらなる宇宙研究につなげていきたいと考えておりますので、引き続きご支援賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

おわりに

以上、香川大学医学部薬理学講座の研究の概要、ならびに最近報道されましたJAXAとの共同研究について報告申し上げます。小さな教室ですが、社会への貢献を目指して教室員一同、日々研究に精進していく所存でございますので、引き続きご支援賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

清元秀泰先生(3期生):令和の幕開けと共に姫路市市長就任

「人に寄り添い、人をたいせつにする行政を」

姫路市長

清元 秀泰 (昭和63年卒・3期生)



香川大学医学部同窓会(讃樹會)会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、私儀、本年4月21日に行われました地方統一選挙において、姫路市民のご信託を得て、姫路市長に選出されましたこと、本紙面をお借りいたしましてご報告させていただきます。

私の就任は平成31年4月30日で、奇しくも、私は平成最後の姫路市長となり、令和の最初の市長として職務に就きました。そして、令和元年の幕開けと共に、姫路市民53万人の命を預かる市長として市政を担い始めました。

思い起こせば香川大学循環器・腎臓・脳卒中内科を辞して、東北大学に奉職したのが2010年10月。それから、はや9年。東北に異動して半年で東日本大震災の真ただ中の厳しい現場を経験し、さらに内閣官房直下のAMED(日本医療研究開発機構)調査役兼プログラムオフィサー(PO)を務めました。東京の中央省庁での勤務で、大きな人生の転機を迎えました。国会議員の先生方や中央省庁の官僚の皆さんと国民の医療や健康政策を立案し、大きな施策を実現する政治のダイナミズムを日々重ねるうちに、故郷である姫路に

おける様々な問題・課題を、これまでの経験を活かして解決していきたいという強い決意が沸き上がりました。そして、一念発起、平成30年4月末に東北大学を辞職し、地元姫路に戻り、政治活動を始めました。それから約1年、広い姫路市内をくまなく駆け巡り、人をたいせつにする人を中心とした政治を実現するべく、まさに東奔西走の日々でした。姫路市内、兵庫県内のみならず、日本中のあらゆる地域の同窓の方々に、一方ならぬご支援を頂きましたこと、合わせて御礼申し上げます。

私は、これまでの経験を活かし、姫路市民の「命」と「くらし」を大切に政治を貫きたいと思っています。私が理想とする市長の資質とは、強いリーダーシップで近未来に向けての適切なビジョンを持つことであり、そのビジョン実現のためにも、周りの人を納得させる確かな実行力を発揮することです。そして、現在の市民に対する責任はもとより、継続性・持続性のある施策を着実に実行することで、まだ生まれていない未来の市民に対してもしっかりと責任政治を実践していくことでもあります。

令和の幕開けと共に始まった市長の業務は、これまでの仕事とは全く異質の、そして想像以上に多忙を極める激務の日々です。しかし、多忙にかまけて自身の初心を忘れることなく、日々精進し、人の命をたいせつにする市民感覚を持ち合わせたフレンドリーな市長として精一杯努めさせて頂きたいと思っております。

最後に、母校香川大学の皆様や讃樹會会員の皆様方のご活躍を祈念するとともに、引き続き今後とも温かいご支援、ご指導・ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。



初登庁挨拶(令和元年5月7日)

清元 秀泰 プロフィール

昭和57年3月 兵庫県立姫路西高卒業
 昭和57年4月 国立香川医科大学(現国立香川大学)医学部医学科入学(3期生)
 昭和63年3月 国立香川医科大学(現国立香川大学)医学部卒業(医籍登録)
 平成4年3月 同大学大学院修了、医学博士号(甲種)取得
 平成4年8月 テキサス大学ヘルスサイエンスセンターサントニオ校 学術研究員

- 平成7年9月 国立香川医科大学（現国立香川大学）医学部
附属病院第二内科勤務
以後、助教、第二内科医局長、講師を歴任
- 平成22年10月 東北大学医学部医学系研究科腎高血圧内分
泌科に異動、准教授を経て
- 平成24年2月 東北大学東北メディカル・メガバンク機構
地域医療支援部門 部門長（教授）
- 平成28年4月 日本医療研究開発機構（AMED）調査役・プロ
グラムオフィサーに就任（出向）
- 平成30年5月 東北大学東北メディカル・メガバンク機構を
辞職し、客員教授
- 平成31年4月 姫路市長選挙 当選（得票数：109,365票
を獲得）
- 令和元年5月 姫路市長として市政執務を担う

◆正範語録

実力の差は努力の差
実績の差は責任感の差
人格の差は苦勞の差
判断力の差は情報の差
真剣だと知恵が出る
中途半端だと愚痴が出る
いい加減だと言いつ（ばかり）が出る
本気ですると大抵のことはできる
本気でするから何でも面白い
本気でしているから誰かが助けてくれる

◆好きなことば

至誠惻恒（しせいそくだつ）。

山田方谷師のことばで、まごころといたみ
寄り添うところがあれば、全てに優しくなれ
ると、常に志高く行動してきました。



神内済先生(23期生):日本小児神経学会優秀論文賞受賞

日本小児神経学会優秀論文賞受賞のご報告

香川大学医学部小児科

神内 済 (平成20年卒・23期生)

讃樹會の皆さま、初めまして。私は香川医科大学医学部医学科23期生の神内済と申します。このたび、2019年度日本小児神経学会優秀論文賞を受賞し皆様にご報告する機会をいただきましたこと、大変光栄に思います。

この賞は、毎年、日本小児神経学会機関誌「脳と発達」および「Brain & Development」に掲載された論文の中から2編以内を表彰するもので、その研究に対して贈られるものです。

私は、2008年3月に香川大学医学部を卒業し初期臨床研修を開始し、2010年に香川大学小児科学講座に入局しました。当時の伊藤進前教授の勧めもあり同大学院に進学し、日下隆現教授のご指導のもと、当講座の長年の研究テーマである新生児低酸素性虚血性脳症について学位論文を執筆し、受賞に至りました。

当講座の新生児低酸素性虚血性脳症に関する研究は、初代故大西鐘寿名誉教授をはじめとする多くの先達の皆さまの努力があり、今日まで続けられてきました。その研究に参加し、大学の本分である、臨床・教育・研究をすべて維持することの大変さを、数え切れないほど多くの方に助けていただきながら、一部ではありますが知ることができました。

本研究では、新生児豚を全身麻酔・人工呼吸管理下におき、低酸素虚血負荷や低体温療法を行って生体反応を記録し、病理学的に組織障害を評価しますが、実験は金曜日の朝から翌週水曜日にかけて行われます。金曜日の早朝から研究協力員さんが讃岐山脈の山中にある養豚場までお迎えに向かってくださり、車に揺られ大学までやってきます。仔豚がやってきたら、臨床業務を数少ない他の先生方にお任せし、実験に取り掛か

ります。ペットボトルに細工したマスクと流量膨張式バッグを用いて吸入麻酔を行い、愛護的に気管挿管して人工呼吸管理を開始、臍動静脈カテーテルを挿入して各種投薬と動脈血圧測定を行います。実際の新生児医療で重症例を行う処置が多く含ま

れ、当時小児科新生児部門の若手であった私にとって数少ない臨床手技獲得の場でありました。低酸素負荷は吸入酸素濃度を2-3%まで下げて行い、仔豚のバイタルをモニターしながら20-30分継続します。個体間の負荷強度をなるべく均一にそろえるプロトコルですが、時には過負荷になることもあり、心停止した仔豚に心臓マッサージを要したこともありました。負荷の後は土曜日の朝まで全身麻酔下の観察を続けますが、学生さんの気管吸引や点滴の更新など献身的な看護がなければ成り立ちません。土曜の朝に麻酔を中止して抜管、保育器へ収容して経管栄養を行いながら水曜日まで仔豚の症状を観察します。経口哺乳して歩き回る仔豚もいれば、けいれん群発のため水曜日までもたない仔豚もいて、仔豚の犠牲をはじめとする代償の上にもきちんとデータが取れないこともあり、大変悔しい思いをしました。水曜日には神経機能形態学、炎症病理学教室の先生方の協力のもと、Sacrificeと病理標本作成を行い組織学的評価を行います。このように、1回の実験でも数多くのご協力をいただいていたことを改めて思い出し、感謝の気持ちでいっぱいになります。こうして苦勞して集めたデータを、人手の少ない臨床の合間にまとめ、日下教授をはじめとする講座の先輩方とのディスカッションや学会発表を重ねて新生児医療に示唆ある論文の形にする作業は、何にも代えがたい貴重な経験となりました。同様の経験をこれからの後輩にも贈れるよう精進してまいります。

最後になりましたが、今回紙面を与えてくださいました讃樹會事務局の皆さまに感謝申し上げます。筆をおきたいと思っております。ありがとうございました。



理事会議事録

令和元年度第一回理事会 令和元年8月5日(月) 20:00~21:00

1. 平成30年度決算承認

出口事業局長不在により、形見監査委員長から、「収支報告書、各種通帳等の確認を行い、監査委員会では、平成30年4月1日から平成31年3月31日の平成30年度の決算報告書の監査を実施しました結果、適正妥当に行われているものと認めました。」との監査報告があった。併せて、二見・岩村会計事務所の監査報告も資料とされた。以上より、拍手によって全会一致で承認された。

2. 令和元年度予算審議・決定

事業局長に代わり佐藤会長が30年度の決算をもとに作成された令和元年度の予算案を読み上げた。昨年の決算と比較して予算が大きいものとして、国外留学助成金事業費、学生援助費、研修医協力費、学会助成金事業費、事務局設備投資費（パソコンのアップグレードのための購入）が挙げられた。本予算案に対して、拍手によって全会一致で承認があった。

3. 令和元年度第一回国外留学助成金審査・決定

不在の筒井学術局長に代わって大西議長から、高橋耕治先生（H18年卒）から申請があったことが報告された。筒井学術局長による第一次審査の通過と、会費は完納されている旨の説明があり、全会一致で予算内満額の25万円が交付されることが決定した。

4. 令和元年度研究助成金/奨励金審査・決定

学術局長に代わって、佐藤会長が「選考過程についての説明」を代読した。

研究助成金4件、研究奨励金5件の申請があり、学外評価委員16名の採点を集計した審査結果が資料とされた。その結果、評価委員による最高点を獲得された研究助成金部門の中村信嗣先生（H16年卒）と研究奨励金部門の守時政宏先生（H19年卒）が、理事の満場一致の拍手で受賞者に決定した。

5. 令和元年度学会助成金審査・決定

前回の理事会で学会助成金の応募締切は開催前年の6月末と決定した。ただし本年は締切期日移行年であるため、本年開催の学会は、これまで通り3月末までの申請を受け付けた。

本年6月末までの申請（来年開催）は、「国際複合医工学学術集会（消化器・神経内科学）（2020年開催）」の1件だけで、本年3月末までの申請（今年開催）は「第29回日本循環薬理学会（薬理学）（2019年11月開催）」の1件であった。

既に今年度開催の学会への助成は、前回理事会で3件決定しており、それに今回の申請を加えると以下の4件となり、合計金額が今年度予算案に反映されることが確認された。

- ①IPOKRa TES JAPAN 2019（小児科）②日本超音波医学会 第29回四国地方会③第31回肝胆膵外科学会（消化器外科）※①～③は開催終了 助成金交付済。
④第29回日本循環薬理学会（薬理学）本理事会で決定。

6. 学生支援（競争的資金）審査・決定

6月末の締切を1ヶ月延長したが、応募が3件のみであった。申請の3件について、拍手で全会一致で承認された。

更に、年間上限5件までという枠があるが、今年度は3件だけであったため、残りの枠をどのように扱う

か審議された。5件の枠を使い切るという規約ではないことと、申込み締切日が決定しているので、申請のあった3件で今年度の募集を打ち切ることが拍手で承認された。

7. 法人化に向けて

法人化を進めるか否かが理事会で審議された。

法人化を進める意向の執行部からは、法人化の目的として、現在、卒業生が3200名を超える団体である同窓会は、同窓というつながりを軸とするだけでなく、法人化によって社会的にも透明性のある組織を立ち上げて、対外的な信用を得ることで、会員からの信頼を更に強固なものとし、国公立統合の動きが始まったこの時代に母校が生き残るべく同窓会が支援するということがあるとの説明が行われた。

会費についても、完全未納の会員の会費納入率が改善し、昨今の右肩下がりの会費収入の傾向が持ち直すためにも、現状維持の運営から、法人化を目指す前向きな体制に変えていく必要があると言及した。

これに対し理事から、会費の納入率や会員からの信頼や同窓会への愛着は、法人化とは単純につながらないのではないだろうか、まずは会費を集めることが重要という意見が出た。さらに、法人化して実現したい具体的なビジョンを提示することで、それに共感して会費の納入率が上がることが考えられるので、まずは法人化の先のビジョンが必要であるとする意見があった。また、歴史のある他大学の法人化された同窓会と比較した場合は、自ずと違いがあり、まだ時期尚早の懸念があるという意見も出た。

執行部としては、会費納入率の低下に対し、寄附金収益による収益アップを検討していたが、寄附に対する税金控除がある公益社団法人化は現状では非常に困難であることから、「非営利一般社団法人」を目指し、更に詳しく調査を行うため、プロジェクトチーム（濱本名誉会長、星川洋一副会長、中村丈洋副会長）を立ち上げ、法人化のメリット及びデメリットと方法について研究し、今後の理事会において報告することとなった。

8. 次年度会長選挙及び理事選挙について

植村選挙管理委員長に代わって、佐藤会長より、令和2年度は、会長選挙並びに理事選挙の実施年であることが告知され、総会開催日（未定）までの選挙スケジュールの概略が説明された。

9. その他

佐藤会長より、会費未納者への会費納入のお願い文書の差出人名が会長名や事務局よりも、各卒年の理事名を入れた方が受け取った会員の気持ちが入りに傾くのではないかと意見が執行部に出ていることについて、理事へ意見を求めた。

理事からは、文書の中に、同窓会の実際の活動内容や今後のビジョン、会長の熱い思い、展望等が入り、香川大学が他大学との力関係で大変厳しい状況にあること、運営的にも厳しく何とか同窓会として大学を助けていきたいという趣旨で、だから各卒年としても頑張っていこうということなどを織り込み、協力を呼びかけるよう希望が述べられ、理事名で出すことの承認があった。

平成30年度会計報告

平成30年度収支計算報告書

平成30年4月1日から平成31年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入			
①会費・入会金収入	9,000,000	8,464,000	- 536,000
②寄付金・広告収入	1,000,000	820,000	- 180,000
③委託手数料収入	2,160,000	2,260,244	100,244
④雑収入	0	1,482	1,482
事業活動収入計	12,160,000	11,545,726	- 614,274
2. 事業活動支出			A) - B)
①事業費支出			
会報制作費	900,000	1,087,020	- 187,020
後援協賛事業費	600,000	456,969	143,031
支部・同期会費	200,000	287,372	- 87,372
学術助成金事業費	1,620,000	1,613,584	6,416
国外留学助成金事業費	500,000	250,000	250,000
学生援助費	800,000	490,000	310,000
国際交流協力費	300,000	0	300,000
研修医協力費	1,000,000	737,900	262,100
講演会費	500,000	431,648	68,352
総会費	500,000	451,560	48,440
学会助成金事業費	140,000	140,000	0
地域連携協力事業費	500,000	509,753	- 9,753
事業費支出小計	7,560,000	6,455,806	1,104,194
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,219,450	550
事務局・各委員会運営費	1,249,012	1,296,523	- 47,511
讃謝会シンボルフラッグ作成費	130,000	0	130,000
ホームページ管理費	100,000	162,000	- 62,000
通信費	600,000	1,127,493	- 527,493
慶弔費	100,000	148,500	- 48,500
雑費	83,000	72,906	10,094
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	0
事務局設備投資費	0	0	0
管理費支出小計	4,582,012	5,126,872	- 544,860
事業活動支出計	12,142,012	11,582,678	559,334
当期事業活動収支差額	17,988	- 36,952	
前期繰越収支差額	38,431,290	38,431,290	
次期繰越収支差額	38,449,278	38,394,338	

貸借対照表

平成31年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(38,394,338)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	38,394,338	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,000,000)		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	38,394,338
合計	54,394,338	合計	54,394,338

財産目録

平成31年3月31日

単位：円

資産の部		
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		355,387
ロ) 普通預金 百十四銀行三木支店		680,620
ハ) 郵便貯金 郵便振替貯金事務センター	26,083,275	
ニ) 定期預金 香川銀行本店営業部	10,194,387	
百十四銀行医大前出張所	1,080,669	
流動資産合計		38,394,338
2. 固定資産		
(1) 特定目的資産 同窓会館建設引当預金		
	16,000,000	
固定資産合計		16,000,000
資産合計		54,394,338

監査報告書

令和元年5月27日

香川大学医学部医学科同窓会
讃謝会会長 佐藤清人 殿

公認会計士 岩村浩二

私は、香川大学医学部医学科同窓会讃謝会の平成30年4月1日から平成31年3月31日に至る平成30年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。

以上

監査報告書

令和元年7月8日

香川大学医学部医学科同窓会
讃謝会 会長 佐藤清人 殿

監査委員長 形見知彦

讃謝会監査委員会は、平成30年4月1日から平成31年3月31日に至る平成30年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

令和元年度予算

令和元年度予算

平成31年4月1日から令和2年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

	令和元年度予算	30年度決算
1. 事業活動収入		
①会費・入会金収入	8,500,000	8,464,000
②寄付金・広告収入	850,000	820,000
③委託手数料収入	2,490,000	2,260,244
④雑収入		1,482
事業活動収入計 ①	11,840,000	11,545,726
2. 事業活動支出		
①事業費支出		
会報制作費	1,000,000	1,087,020
後援協賛事業費	550,000	456,969
支部・同期会費	250,000	287,372
学術助成金事業費	1,650,000	1,613,584
国外留学助成金事業費	750,000	250,000
学生援助費	800,000	490,000
国際交流協力費	150,000	0
研修医協力費	1,000,000	737,900
講演会費	450,000	431,648
総会費	0	451,560
学会助成金事業費	420,000	140,000
地域連携協力事業費	0	509,753
事業費支出小計	7,020,000	6,455,806
②管理費支出		
事務人件費	2,220,000	2,219,450
事務局・各委員会運営費	1,200,000	1,296,523
事務局設備投資費	350,000	0
ホームページ管理費	50,000	162,000
通信費	830,000	1,127,493
慶弔費	100,000	148,500
雑費	80,000	72,906
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000
管理費支出小計	4,930,000	5,126,872
事業活動 (=事業費 + 管理費) 支出計 ②	11,950,000	11,582,678
当期事業活動収支差額 ①-②	-110,000	-36,952
前期繰越収支差額	38,394,338	38,431,290
次期繰越収支差額	38,284,338	38,394,338

令和元年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

速報

部 門	受賞者	研究題目
研究助成金	中村 信嗣 (平成16年卒) 香川大学医学部 小児科	新生児低酸素性虚血性脳症に対する低体温療法・水素ガス吸入による新規脳保護治療戦略の確立
研究奨励金	守時 政宏 (平成19年卒) 香川大学医学部 循環器・腎臓・脳卒中内科	免疫調節因子ガレクチン-9を用いた心腎連関新規メカニズムの解明

◆選考過程のご報告◆

第15回(令和元年度)讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門4件、研究奨励金部門5件の全9件の研究助成／研究奨励助成申請があり、学外評価委員によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いすることとなりました。

採点は6つの項目(1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度)に対して、それぞれ5段階評価(5点:極めて高い、4点:高い、3点:やや高い、2点:やや低い、1点:低い)を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では中村信嗣先生の「新生児低酸素性虚血性脳症に対する低体温療法・水素ガス吸入による新規脳保護治療戦略の確立」(383点/5点満点)が第一位となりました。研究奨励金部門では守時政宏先生の「免疫調節因子ガレクチン-9を用いた心腎連関新規メカニズムの解明」(370点/5点満点)が第一位となりました。また、今年度の全体の平均点は3.57点/5点満点でした。

学外評価を基に8月5日開催の令和元年度第1回理事会において、中村信嗣先生に金壹百万円、守時政宏先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員

臨床科

	氏名	
1	伊藤 進	香川大学 名誉教授
2	今井 裕一	愛知医科大学 名誉教授/多治見市民病院 病院長
3	香美 祥二	徳島大学医学部医学科発生発達医学講座小児医学教授
4	千田 彰一	香川大学 名誉教授
5	成瀬 光栄	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 臨床研究企画運営部特別研究員/医療法人仁会武田総合病院 内分泌センター長
6	原 量宏	香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授
7	水野 博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
8	吉栖 正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学教授

基礎科

1	梶谷 文彦	川崎医科大学名誉教授/川崎医療福祉大学客員教授/岡山大学特命教授/AMED医療機器開発推進研究事業プログラムスーパーバイザー
2	小林 良二	香川大学 名誉教授
3	阪本 晴彦	香川大学 名誉教授
4	田畑 泰彦	京都大学ウイルス・再生医科学研究所 再生組織構築研究部門 生体材料学分野 教授
5	徳光 浩	岡山大学大学院自然科学研究科生命医用工学専攻細胞機能設計学 教授
6	西堀 正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻生体薬物制御学講座 薬理学分野 教授
7	藤田 守	久留米大学医学部客員教授/長崎大学医学部客員研究員/産業医科大学医学部非常勤講師
8	森田 啓之	岐阜大学大学院医学系研究科 神経統御学講座生理学分野教授

(敬称略)

国外留学助成金 受賞の言葉

令和元年度第1回国外留学助成金

高橋 耕治 (平成18年卒・21期生) 京都大学医学部附属病院 呼吸器外科

留学先機関：Martin Luther-Universität Halle-Wittenberg, Germany (大学名)
Medical Faculty Institute of Molecular Medicine, Tumor Biology Unit (教室名)

留学期間：2019年4月～2020年3月

研究課題：「癌細胞内のシグナリング伝達、特にGab1とc-Metの結合が及ぼす影響について」



【謝辞】

この度は留学助成金を頂くことになり、誠にありがとうございます。当面无給での留學生活ですので非常に支えになります。私は平成18年に香川医大を卒業後、呼吸器外科医として京都大学の医局に属して研鑽を積んで参りました。当医局は「academic surgeon たれ」という方針であり、私も卒業後10年程度で京大の大学院で研究を始めました。肺癌の術後再発や転移のメカニズムに興味があったためEMT（上皮・間葉転換）の研究を行い、卒業時にはまだ研究を続けたいと思うに至って留学を決めました。元々ドイツとその文化（サッカーなど）に興味があり、先輩のツテを辿って旧東ドイツのHalle という街で研究生活を送っております。ドイツ人は朝が早いので7時半から実験を始めていますが夕方には研究所は閑散とし、17時にはほぼ誰もいなくなり、週末もしっかり休みます。メリハリのある生活で研究への集中力も上がり、オフの時間は息子たちを通してドイツサッカーの育成を体感することもできています。

最後に、本案件に対して推薦を頂いた彦根市立病院呼吸器外科部長・林栄一先生と、京大病院で勤務している同級生の河口浩介先生に深謝致します。

ニュースの窓

平成31年度香川大学入学式 ～医学科新入生は109名～

4 / 3

快晴の空のもと桜が満開となった4月3日（水）、香川大学幸町キャンパスにおいて、平成31年度入学式が執り行なわれました。午前9時開始の大学院入学式に引き続き、午前10時から大学講堂において学部入学式が行われました。

学部新入生は1321名のうち医学部は194名で、内訳は、医学科109名、看護科65名、臨床心理学科20名です。

医学部新入生は、午前中の式を終えた後、昼にはバスで医学部キャンパスに到着しました。例年、バスを降りた新入生を囲む先輩たちによるサークル勧誘の道ができるのが恒例でしたが、今年はこの場でのチラシの配布はありませんでした。その代り、初めて医学部キャンパスに降り立った新入生たちに、先輩が「よく頑張った！」と歓迎のエールを送って出迎えました。



《《《 特集 1 》》》

病院再開発整備事業の完了について

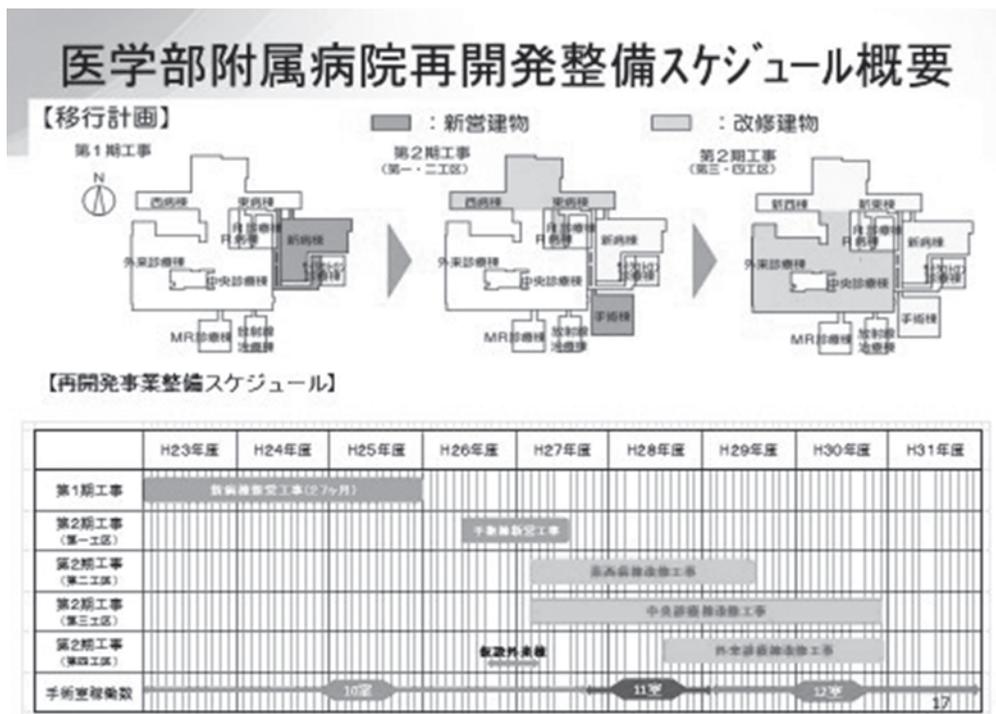


副病院長（病院再開発・広報担当）
日下 隆（平成3年卒・6期生）

リニューアルした正面玄関：平成31年3月完成

このたび、香川大学医学部附属病院では、災害拠点病院としての施設の充実・強化、病棟・外来における患者さんの療養環境の向上、最新の高度医療を提供するための基盤強化などを目的として、平成23年度から進めてまいりました病院再開発整備事業（8年間）を終えることができました。

◆再開発整備スケジュール◆



第Ⅰ期工事期間（南病棟新築：平成23年度～平成25年度）による整備につきましては、第48号同窓会会報（平成26年9月1日発行）におきましてご報告させていただきましたので、今回は第Ⅱ期工事期間における整備内容について簡単にご報告いたします。

◆手術棟：平成27年10月完成◆

まず、手術棟（4階建、鉄筋コンクリート造、建築面積約1852㎡、延床面積約5,272㎡）につきましては、平成26年9月に着工、平成27年10月に新営完成いたしました。1階は放射線部の拡充、2階は材料部、3階は手術部の拡充、4階は機械室となっており、平成26年3月に完成している南病棟3階ICUと手術棟3階の手術部は渡り廊下で直列接続となっており、術後のICU管理が必要な患者動線がスムーズとなっております。

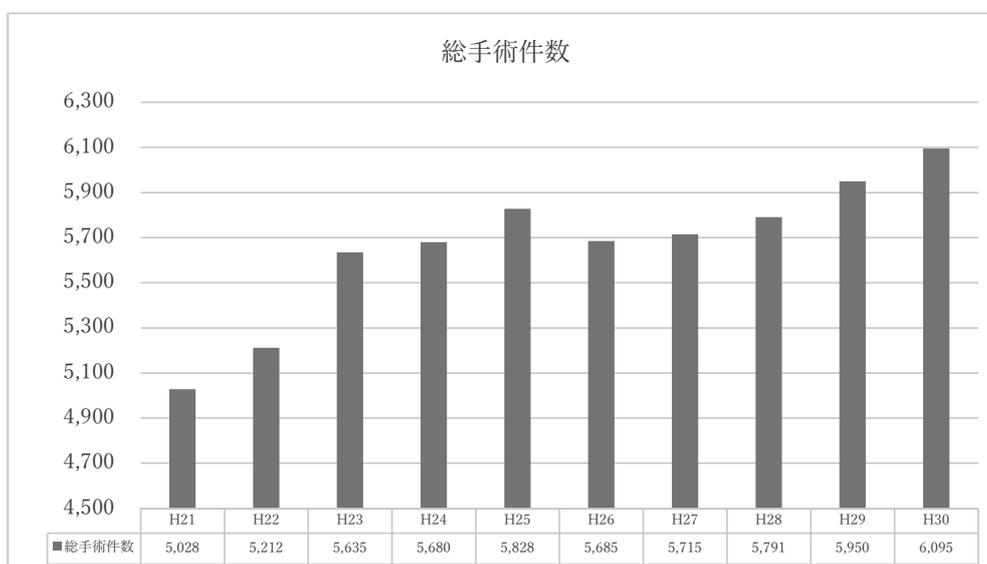


◆ハイブリッド手術室◆



平成28年1月4日より稼働を開始し、手術室が10室より12室に増え、ロボット手術やハイブリッド手術、MRI可能なナビゲーション手術といった高度な最新手術により手術患者の受入を拡充し、平成30年度は開院以来初となる年間6,000件超を記録いたしました。

◆年間手術件数◆



◆東病棟：平成29年2月完成◆

さらに、平行して東西病棟・中央診療棟・外来棟の耐震性の増強と機能拡充のための改修工事を行い、平成29年2月に東病棟改修の完成、平成29年10月に西病棟改修の完成、平成31年1月に外来棟改修の完成、平成31年3月に中央診療棟・病院玄関前プラザ改修の完成に至っております。

改修後の東西病棟では、従来の6床室をプライバシーに配慮したベッド間隔ゆとりのある広い4床室に改修し、個室も多く配置し療養環境の充実を図っております。

さらに、外来診療棟は改修により、診察室等の配置に、アイランド方式を採用し、今まで以上に自然光が取り入れられ明るく、広い待合いスペースとなっております。



◆外来ホール：平成30年12月完成◆

病院玄関前プラザは、売店、喫茶棟前に広いオープンスペースを確保し、開放感のある広場となりました。今後はさらに患者さんや来院の方々がゆっくりとくつろげる“心やわらぐ広場”を目指してまいります。

最後になりましたが、再開発期間中は、患者さんをはじめ関係者の皆様にはご不便、ご迷惑等をおかけしておりましたが、これを機に、これまで以上に地域住民の皆様へ最新・最良の医療を安全に提供しつつ、高い能力を持った医療人の教育・輩出、新たな医療の研究・開発等に邁進してまいります。

引き続き、讃樹会の皆様のご理解とご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



◆正面玄関前プラザ◆



《《《 特集 2 》》》

『平成元年に生まれて』

平成

令和

令和という呼び方もすっかり落ち着いた感がありますが、本年5月1日は、平成から令和へと元号が変わる歴史的に大切な日となりました。「平成」は、昭和世代にとって十分新時代の息吹を感じるものでありましたが、30年4か月という年月を経て、新たな希望を込めた「令和」へと受け継がれました。この歴史的な年ならではの特集として、平成元年に誕生され、平成に育ち、そして医師となられた先生に「平成元年に生まれて」というタイトルで近況報告をしていただきました。

卒後を振り返って

慶應義塾大学医学部 血液内科
城下 郊平 (平成25年卒・28期生)

今回ありがたいことに「平成元年に生まれて」というタイトルで近況報告の機会を頂くこととなりました。平成元年生まれの私は、「平成を振り返るとなる」と「これまでの人生」となり、同窓会誌に載せるに足る、語れるほどの人生だったかという首を傾げてしまいます。ですが、先輩方にはこんな奴が今頑張っているのかと、後輩にはこんな考え方の人もいるのかと知って頂ければ、そして自分としても令和元年という節目に改めて気を引き締めようと思い、卒後を中心に振り返りたいと思います。

私は学生時代から医学研究に興味があり、研修終了後に速やかに大学院への入学を考えていました。教育的かつ学術活動が盛んであることから初期研修先として母校の附属病院を選択しました。1年目には、2回の内科学会地方会発表の機会に恵まれ、その1つは英語のケースレポートに報告しました。最後まで根気強く、ご指導くださった今滝先生、ありがとうございます。2年目は香川労災病院の放射線科・腎臓内科、坂出市立病院の内科・泌尿器科に勤務しました。各科

の代表的疾患の標準治療を学び、検査研修では心エコーや内視鏡を経験することができました。2年目は主体的に病棟管理や当直に関わるようになったため、初めての経験が多く、刺激的でありつつも自分の未熟さを痛感する日々でした。

初期研修が佳境に差し掛かる頃には、大学院進学への想い以上に、内科系主要疾患を経験し、臨床医として独り立ちしたい、という想いが強くなりました。そこで内科全般のトレーニングが可能な後期研修病院を探し、神奈川県にある川崎市立川崎病院を見つけました。川崎病院は713床を持つ川崎市の基幹病院で、内科後期研修医が主体となり、全ての内科系疾患を同時並行で診療する形をとっており、まさに私が理想とするプログラムでした。たった1回の見学でしたが、先輩方の活気溢れる姿を見て後期研修場所に即決しました。川崎病院の理念に「病気でなく病人を見る心を大切に」というフレーズがありますが、まさにそれを実践している病院でした。内科の知識や経験はもちろんのこと、外来を通じて主治医の責任感や難しさを学びました。

川崎病院は慶應義塾大学の関連病院であり、週1度大学から派遣される血液専門医（川崎病院OB）にコンサルテーションする場がありました。慶應義塾大学血液内科は、日本における造血幹細胞移植の第一人者である岡本真一郎教授が主宰する講座です。次のステップとして造血幹細胞移植を基礎から深く学びたいと考えていたこと、一般血液内科から造血幹細胞移植まで診られる血液内科医を育てたいという岡本教授の方針に共感したこと、そして自分の目標とする指導医の先生が川崎病院から慶應大学へ進み活躍されていたこと、からこちらで学ぶことを決めました。先日保険適応となり大きな話題となったCAR-T療法ですが、海外では既にこの治療を持ってしても治癒しない患者さんが報告されています。つまり、現状は同種移植が難治性造血器腫瘍の最後の砦です。私が病棟医の2年間で、10件弱の同種移植を主担当医として経験することができました。血液内科の中でも「移植医」は数少なく、造血幹細胞移植の専門家の元で指導を受けられたことは貴重な経験でした。また、欧州骨髓細胞移植学会やアジア太平洋造血幹細胞移植学会などの国際学会で発表する機会を頂きました。

本年度から国立国際医療研究センター生体恒常性プロジェクト（田久保圭誉先生）に所属し、研究活動を開始しました。近年、老化に伴うクローン性造血が造血器腫瘍の前駆状態であることが見出さ

れ、注目を集めています。私はCRISPR/Cas9という新しいゲノム編集技術を用いて、クローン性造血から造血器腫瘍が発症するまでの病態の模倣、また加齢という環境因子によって造血器腫瘍が発症するメカニズムの解明、ということテーマに研究しています。研究自体が素人で試行錯誤と奮闘の日々です。

在学中や働きだしてから「とうとう平成生まれがやってきたか」と度々言われ、（何故か）落ち込まれることがありましたが、そんな私も「とうとう令和生まれがやってきたか」という日が近い将来訪れるのかと思いを馳せています。来たるその時には、母校に何らかの形で貢献し、必要とされる人材に成長していきたいという大きな夢を見つつ、これからも修練を積んで行きたいと思います。



現在の研究室のメンバーと（後列左から3番目が筆者）

平成を振り返って

坂出市立病院 整形外科

川上 翔平 (平成26年卒・29期生)

歴代でも最も長く続いた元号である昭和から、初めて「元号法」という法律に基づいて、1989年に元号が平成に改元されました。私は元年に生を享け、名前にも「平」が授けられるなど平成という元号には思い入れがあります。消費税導入、バブル崩壊といった経済の変化から、ゆとり教育をはじめとした体制の変化など、様々な転換期となった時代だったのではないかと思います。

ファミリーコンピューターなどのゲーム機械や家庭用パソコンの普及で、私を含む子供の遊び方にも変化が生まれ、グローバル化、情報化、AI化といった時代の変化に伴い、新しい問題も次々に勃発しました。

大学に入るまでは特に平成に生まれたからどうという実感はなく、生まれた元号は特に意識することなく育ってきたように思います。一方、医学生として社会に触れることが多くなってきた頃より周囲から、「いよいよ平成が来たか」「若い」といった言葉が飛び交った記憶があります。年代により区切られたためか横のつながりは深く、平成生まれで集まることも珍しくなかったです。若さの称号として、またゆとり世代のレッテルとしての両面を感じながら研修を終えました。平成から令和に元号が変わり数か月。気が付くとそんな私も30歳を迎えていました。平成生まれの医師も多く出てきた今、もうそんなことも言われることは少なくなってきました。しかしおそらく、私が整形外科医として成長したころやってくる「令和」生まれの医師に対しても同じような声をかけてしまうのでしょうか。

日本整形外科学会が外科学会から独立したのが1926年で、平成元年は64年目にあたります。香川医科大学では、上野良三教授のもと整形外科学講座が設立されたのが1982年ですので私はまだ生まれていませんでした。

2019年で整形外科医として4年目を迎え、臨床では頭を悩ませることも多い一方で最近ではやりがいを感じる余裕も出てきました。医局では平成元年生まれは私一人ですが、幸い後輩にも恵まれ、香川県整形外科の平成人口も二桁となりました。これだけの人数で整形外科の魅力を共有できることをうれしく思います。

整形外科は運動器疾患を扱い、病態の解明やより良い治療法の開発を目指す学問です。Nicolas Andryが体系化した「自然治癒力を重視し、肢体の成長力を利用して形態を矯正し、運動機能を回復させる」という固有の治療原理が存在します。18世紀よりこの原理は不変のものであります。したがって、自然治癒力を十分に発揮させる環境づくりと機能再建こそ我々の目指すところ です。

平成時代を経て高齢化問題が深刻化するとともに、骨折や外傷の頻度は増え、需要の高い分野です。治療において整形外科領域ではインプラント・機械の進歩によって治療成績が良くなるのはもちろん、小侵襲手術が可能となるなどその恩恵に与っています。また機能再建は必ずしも個に限ったことではなく、周辺を取り巻く環境、つまり家族や介護者などといった目線からも必要とされる面なのです。たとえば股関節を苦なく曲げられることは、たとえ歩けなかったとしても肺炎などの併発疾患の予防、看護・介護を楽にしますし、本人の苦痛そうな表情がなければ周囲の安心を得られます。古くより受け継がれた原理原則の下で、新しく登場するデバイスをうまく取り入れながら、また問題はつきものですから批判的吟味をしながら、選択し治療していく。これが現代の整形外科の一面であります。

平成という元号は過去のものとなりましたが、その時代をどうであったか評価するのはどうあっても後世以外ありえません。より良い令和時代へ引き継ぐためにも、平成生まれの我々はその時代がよいものであったと、次世代へ自信を持って言えるよう精進してまいります。また、ともに令和時代の整形外科を盛り上げる同胞を随時募集しています。誰にでも気軽にご相談ください。



白鳥病院にて(中央川上)



顔は見えませんが奥向かって左が川上

新しい時代

松戸市立総合医療センター 産婦人科

關 公美子 (平成27年卒・30期生)

平成27年卒の關公美子と申します。医師5年目となり新しい勤務先に慣れてきた頃、讃樹會からの封筒が届きました。5月1日に元号が「令和」に変わり、「平成」に生まれた世代としてなにか投稿を、との執筆依頼でした。何を書いたらよいか困惑しましたが、近況報告を兼ねて少しお話をさせていただこうと思います。

香川大学卒業後は地元である千葉県に戻り、成田赤十字病院で2年間の初期研修を終え、千葉大学の産婦人科に入局しました。現在は松戸市内の関連病院で後期研修医として勤務しています。大学入学前から、何となくですが産婦人科に対する興味があり、病院実習を通じて「お産に関わりたい!」という気持ちが強くなり、そのまま産婦人科に進みました。出生数は年々減少していると言いますが、そんなことを全く感じさせないくらい毎日たくさんの赤ちゃんが生まれています。ハイリスク妊娠を多く扱う施設であるため母体搬送や帝王切開の数も多く、毎日病棟と手術室と外来とを行ったり来たりしています。夜遅くまで残ることも多く、早く家に帰りたい気持ちになることもあります。長い入院期間を終えてようやく我が子に会うことができた患者さんの嬉しそうな顔を見たり、「先生がいてくれてよかった」という言葉を聞いたりすると、この仕事できてよかったな、とまた頑張る気持ちにさせられます。

ちょうど平成から令和に変わる頃、妊婦さんたちは「この子は平成生まれになるかな。令和かな。」とそわそわ、わくわくしていました。30年前に昭和から平成に変わったときもそうだったのかなと思い、親に聞いてみると、30年前は昭和天皇が崩御されたため今回とはだいぶ雰囲気が異なり、自粛ムードが漂っていたようです。平成が始まるとバブルは崩壊し、小学校入学の年には阪神淡路大震災がありました。私は校庭で避難訓練をしたことをよく覚えています。香川大学生やそのご家族の中には実際に被災された方も多いかも知れません。1999年(平成11年)にはノストラダムスの大予言に怯え、コンピュータの誤作動が起こるので

はと2000年問題も騒がれていました。(結果的に地球は滅亡せず、何事もなく2000年を迎えることができました。)平成13年に21世紀を迎えたあとも、平成23年には東日本大震災があったり、平成26年には日本を代表するお昼の番組である笑っていいとも!の放送が終了したり、振り返ってみるとどこか暗いニュースが目立ったように思います。その一方で技術の進歩はすさまじく、人々の生活はどんどん便利になっていきました。新幹線「のぞみ」やLCCなどの交通手段の発達により、物理的な距離感は短くなり、また携帯電話の普及によってコミュニケーションでの距離感も変化してきたように思います。宇宙旅行も現実的になりつつあり、少し前には夢だと思っていたことが実現できるようになってきています。令和にはもっともっと技術が進んで今には想像もつかないようなことができるようになるかもしれません。そんな「令和」を作るのは、令和ベビーではなく、平成を生きた私たちであることを忘れてはなりません。自分たちの手で新しい時代を、より良い、より明るい時代にしていきましょう。



//// 第5回 ////

関 連 病 院

紹 介

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3200人を超え、約900名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後30年以上が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2019年5月22日 10:30からおよそ1時間、さぬき市民病院にお伺いし、徳田道昭病院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

さぬき市民病院の紹介

さぬき市民病院 院長 徳田 道昭



病院全景(正面)

地域における当院の役割と研修

当院は、1951年4月に一部事務組合直営の「大川病院」として、一般病棟40床にて、内科・外科・放射線科の3科から成る診療を開始しました。その後、各科を増科して総合病院となり、2002年には5町合併による‘さぬき市(人口5.6万)’の誕生に伴って現在の‘さぬき市民病院’に改名しました。翌2003年には、地元医師会との連携により‘小児夜間急病診察室’を開設し、‘へき地医療拠点病院’の指定も受けました。

このように、当院は大川二次保健医療圏において、①中核的な急性期医療提供機能、②リハビリテーションを主体とした回復期医療、③訪問診療(在宅療養)を主体とした慢性期医療、さらに④周産期、へき地、災害などの政策的医療、などを提供する地域基幹病院としての役割を果たしてきました。

なお、当院から西へ車で15分の距離には香川大学附属病院があって、救急救命センターも有していることから、当地区における当院の役割としては、超急性期

よりも、一般的な急性期治療から、回復期および慢性期(在宅医療を含む)にいたるまでの管理が主体です。

したがって、当院に研修に来る卒業研修医には、高齢者に多い呼吸器系、消化器系、循環器系を主体とした急性期のcommon diseaseの診断・治療から、在宅復帰を考えた回復期医療、さらに在宅療養を中心とした慢性期医療を経験してもらっています。とくに、高齢者の回復期から慢性期にかけての医療では、栄養とリハビリが不可欠であり、栄養士や言語聴覚士などからなる‘嚙下チーム’が行う評価と実践において、研修医には医師として参加することで貴重な臨床経験を積んでもらっています。

なお、当院における‘チーム医療’の原点には、築40年を経過した建物で患者さんにも職員にも不自由な思いをさせていた旧病院での体験が活かされており、新病院では、高齢者を主体とした治療において随所に



改善を施していることから、この紙面を借りて紹介させていただきます。

新病院に求められた要件～外来、手術室～

2012年に完成した新病院の設計に際しては、高齢化率が約30%に達する地域特性を考慮して、‘高齢者に優しい病院’を基本的なコンセプトとしました。

まず、外来部門では、ADLが低下した患者の移送のために、廊下幅は全て2.7mとして車椅子やストレッチャーがすれ違えるようにしました。

また、診察室や検査室のドアは広めの引き戸を採用して車椅子の入室を容易にし、診察室のベッドは全て電動で上下する仕様として内部も広めにしました。

さらに、リハビリテーション室では、複数の患者が余裕を持って受療できるように広めに設計し、床にはフローリングを採用して日常生活空間に近い彩りを演出しました。また、ベランダに面した窓からは自然光と植栽の緑を取り入れながら、天気の良い日には屋外での歩行訓練も可能になっています。(写真2)



(写真2:リハビリ室)

一方、高齢化に平行する救急医療ニーズに対しては、救急搬送件数の増加に対応するため、救急車2台を同時に受け入れられるように処置室を拡充するとともに、消化管内視鏡室も2室に拡充して、高齢者に多い消化器系急病者への対応を可能にしました。

手術に関しては、手狭だった旧病院の3つの手術室を拡張すると同時に、無菌手術室を1室加えて高齢者に多い人工関節手術を可能にしました。さらに、手術室に隣接して高度治療室(HCU)8床を設置したことで、全身麻酔術後患者や内科系重症患者を主体に、病状が変化しやすい高齢者を集中的に管理することができ、一般病棟の看護負担が軽減されました。

新病院に求められた要件～病棟～

病棟の床には化学繊維のカーペットが敷き詰められており、ベッドの搬送やカートの移動に伴う騒音が軽減したことで夜間の静粛性が保たれています。また、病棟毎に色が違う直線を引いて高齢者が迷わないよう

にも配慮しました。なお、このカーペットは50cm四方のブロック形式になっていて簡単に剥がせることから、血液や吐物などの汚染に対しても迅速な交換が可能です。(写真3)



(写真3:病棟廊下)

居室に関しては、体力や認知能力低下に伴って御家族の介助が必要な高齢者も多いことから、個室数を改築前の2倍(87床、約50%)に増やして、患者家族ともどもプライバシー保護に配慮しました。なお、自治体病院では有償個室数に上限(30%)があるため、重症個室を除いた約16室については無償個室とし、大部屋内の急変患者や不隠患者の収容、感染症患者の隔離など、他の患者の安静・安全・安心を確保することを前提に病棟師長の判断で運用しています。(写真4)



(写真4:個室病室)

高齢者の排泄に関しては、病室の換気が悪かった旧病院では大きな課題となっていました。新病院では、全病室に洗浄機能付き水洗トイレが設置されており、このことは結果的に、高齢者個人の尊厳を保ちつつ、トイレまでの距離が短いために移動意欲も維持され、さらに排泄前後の介助軽減にも役立っています。

各病棟のコーナーとウィングに複数設置されましたラウンジでは、明るい空間でご家族やお見舞いの方と歓談できるようになっており、高齢患者を孤立させない工夫が生きています。また、病院の随所に設置され

ましたアウトデッキでは、慣れ親しんだ風景に包まれながら療養中の患者の癒しに繋がっているように思います。(写真5)



(写真5:ラウンジ)

当院では、急性期を過ぎても継続的にリハビリテーションが必要な患者は、地域包括ケア病棟(36床)のある病棟に移動させており、この病棟には食堂を設置して、食事介助が必要な患者を集められるように

しました。実のところ、この部屋は他にも患者同士の談話会や娯楽(当院では‘アソビリテーション’と呼んでいる)にも使われており、高齢者が多い病院ではこのような多目的空間が不可欠であることを改めて痛感させられています。

新病院効果と今後の課題

今までに述べてきたような通常の急性期と回復期、慢性期機能を柱にして、高齢化地域にある二次機能病院として再スタートした当院には、一日平均約500人の外来受診者と、約150人の入院患者数が利用されています(いずれも2018年度)。

来院者からは様々な意見や要望が寄せられており、まだまだ解決すべき課題はあるものの、「病院全体が明るくなって、職員も生き生きしてきた」という感想も多く、‘ホスピタリティー’を提供する施設として、職員自身が使命感とプライドが育ってきたように感じます。

今後は医療の質の更なるレベルアップを目指して、職員一同頑張る所存ですので、香川大学医学部の卒業生各位には、宜しく申し上げます。

後列左から 山下拓磨先生(消化器内科部長)、
研修医(大川健太先生、佐藤涼太先生、多田羅祐介先生、加地智洋先生)、
大倉亮一先生(消化器内科主任部長)



前列左から 菊池史先生(内分泌・代謝内科主任部長)
濱本龍七郎先生、徳田道昭院長、尾原明子先生(総合診療科(内科)医員)

書籍紹介

西岡先生の近著を読む

讃樹會名誉会長 濱本龍七郎

本年3月、旧第三内科教授西岡幹夫先生（現 香川大学名誉教授）が執筆された「讃岐の医学と蘭学（美巧社、2019年1月発行）」を西岡先生から直接謹呈されましたので、同窓生の皆様にご紹介したいと思えます。休日を利用して約200ページにわたって書かれた文章は大変興味深く、時間を忘れて一気に読破してしまいました。

本書は、江戸期に讃岐から長崎に遊学した学徒について、随筆風にまとめられたものであります。当時、諸外国の文化や学問は長崎を通じて我が国に伝えられ、



これらを直接習いたいという学徒が後を絶たず、全国からの長崎遊学者は1,052名に及びます。県単位で見ると、香川県からの遊学者は50名を超え、全国のベスト5に入ることを知り驚くと共に、讃岐には好奇心の強い人が多数いたのである

うと感慨深い思いが湧きます。

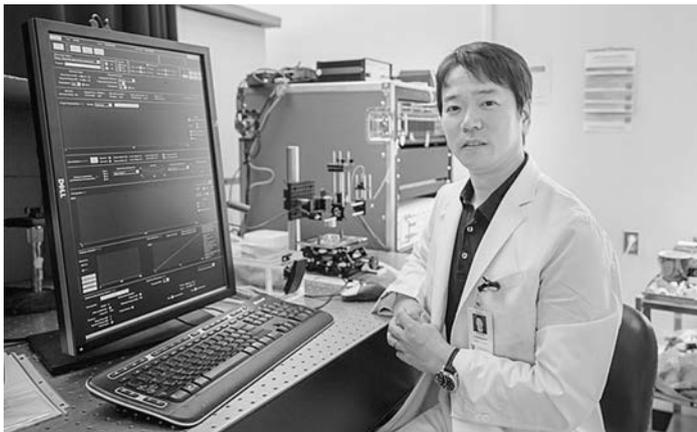
西岡先生宅のある屋島には、「讃岐から初めて長崎遊学した久保桑閑」や「シーボルトに学んだ柏原謙好」らの屋敷跡があり、長崎遊学者に興味を持たれたとのこと。そして、県内の長崎遊学者の出生地を訪ね歩き、直接目で触れ、遠き昔の医学者を思い浮かべて本書の執筆を開始され、書き上げられたと想像されます。

香川で医学を学び、育った我々は、郷土のこれら大先輩の生き様から学ぶところが多いのではなかろうかと思えます。また、西岡先生の類まれな洞察力、文章力には大いに感銘いたしました。

今後ともますますお元気でいらっしゃることを祈願し、讃樹會へのご指導ご鞭撻を御願ひいたく存じます。



国外留学助成金 留学レポート



京都大学医学部附属病院 乳腺外科
河川 浩介 (平成18年卒・21期生)

留学期間：2016年10月—2018年9月（2年間）

留学先：ハーバード医科大学、マサチューセツ
ツ総合病院スティー爾研究所 (Boston,
Massachusetts, USA)

あらためて香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」における国外留学助成金を拝受しましたこと、心より感謝申し上げます。私は2016年10月よりアメリカ、ボストンのハーバード医科大学並びにマサチューセツ総合病院に所属し、腫瘍微小環境の研究に携わりました。2年間のボストンでの生活の後、2018年9月に京都大学に再び所属することとなり帰国致しました。ようやく生活・仕事落ち着いてきた梅雨の時期、このような筆を執る機会をいただきました。これから海外留学を考えられておられます若い先生に少しでもお役に立てるように書き綴りたいと思います。

留学開始まで

後期研修からすぐに乳腺外科を専門にすると決めた私は京都大学乳腺外科の戸井雅和教授の下で研修を積みました。決して手取り足取りのスタイルではありませんが、世界の乳癌診療、研究のトップランナーとしての姿を背中で見せて頂き、“ここに少しでも近づぐためにはいずれ海外へ”と思うようになりました。留学準備に当たり、戸井先生から言われていたことは“行き先に関して一切口を出さない、自分の力で道を切り開きなさい”でした。大学院生時代の目標は、1)一つでも多くの乳癌患者さんにとって意味のある論文を出す事、2)海外発表を可能な限り行うこと、3)助成金へのチャレンジは全部することでした。一流の研究室では一年間の給料分(600万円くらい)のグラントは取ってから応募するのが当たり前であり、後述するJain博士にも最低条件として求められました。ただ、日本ではその機会自体が非常に限られているため、競争率が非常に高く、必然的に1)、2)の業績がないと3)を獲得するのが難しいのが実際です。周りの先生のご指導のお陰で3本の英文論文、12回の海外での学会発表、本助成金を含む3助成金を獲得することが出来、ようやく挑戦権を得たのが2015年の冬でした。

当時メラノーマに対するImmuno-Oncology Agentの画期的な効果が発表され、私自身も癌免疫の研究を行っていたため、挑戦先は腫瘍免疫微小環境研究で世界をリードしていたハーバード医科大学のRakesh

Jain博士の研究室を選びました。日本に講演会に来られたときに直接お願いをし、インタビューとセミナーをする機会を与えて頂きました。すぐにボストンの研究室に行って、インタビュー30分×7人(助教以上スタッフ全員)とセミナー1時間を終え、数ヶ月後にOKをもらい安堵した日のことは今でも忘れません。

留学1年目

ボストンでの生活は、私にとって想像以上に厳しいものでした。よく留学楽しかったとか、もう日本に帰りたくないとか声を聞くことがありますが、少なくとも私の周囲でそのようなことを言う人はほとんどいなかったように思います。今でも私は“留学が楽しかった”とは言えることは出来ません。私の所属していた研究室は総勢65名程のハーバードでも屈指の大所帯でした。それ故、馴染み、信頼を得て、仕事を自分のものにするのには時間と労力を費やしました。

海外の人は9時5分で働く、と言いますが、トップラボに情熱と野心を持ってきている若い研究者には全く当てはまらないようでした。(日本人はよく働くから海外で重宝されるという言葉は、これから海外を目指す若い先生は忘れた方が良いでしょうに思います。)認



朝は毎日一緒に小学校まで登校。親にはつらい雪道も楽しそうでした。(2017年冬の登校時に撮影)

められるためには実験量・仕事量だけでは無く、バックグラウンドの知識量、プレゼンテーション能力など総合力が必要とされます。これらは全て大学院生の4年間を終えるまでに身につける能力であり、いちいち留学先で教えてはくれません。

さらに慣れない厳しい気候、文化の違い、言葉の壁があり生活は安定しません。日本であれば超マイナートラブルが、海外生活ではメジャーなトラブルとして襲いかかります。長い雪に覆い尽くされた冬はマイナス20℃の日がざらにあり、ストームが来れば狭い部屋に家族4人閉じ込められ精神的に追い込まれたこともありました。基盤となる生活が安定しないと、仕事のパフォーマンスも安定しないのはアメリカでも日本でも同じです。留学して最初の1年間、これまでの人生において最もつらかった1年間であることは、おそらくこれからも変わらないと思います。唯一の救いは4歳の娘が気丈に振る舞い頑張ってくれたことで、娘は2年間で一度も“日本に帰りたい”と言いませんでした。また、恩師の戸井教授が学会帰りにわざわざボストン経由で来て下さり、“Achievementは論文だけじゃない、目に見える物だけではない。今後患者さんに貢献できるような色々経験を積んできなさい”と言われ、心がすっと軽くなったのを覚えています。

留学2年目

2年目になるとある程度の日常生活には慣れて来て、多少のトラブルにも何も感じなくなりました。スー



家族4人でアメリカ最古の公園であるボストンコモンにて帰国前に撮影。支えてくれた家族には感謝しかありません。

パー行って、帰りに車が無くなっていたときにも、「ああ、場所が悪くてレッカーされたんだね。警察に電話して取りに行くから先にUberで帰ってて」という感じで淡々とトラブルシューティング出来るようになりました。ラボの方にも大きな変化があり、周りから信用され始め、いろいろなプロジェクトに関わる事が出来ました。プロジェクトリーダーとして3プロジェクト、その他にも「Kosukeの時間に合わせるから、実験一緒に手伝って!」とよく言われる様になりました(1年間見向きもされませんでした。急に)。嬉しい気持ちと同時に、「調子いいなこいつら」とも思いましたが、帰国時に同僚達に言われた言葉に納得しました。「Kosukeにお願いしたのは、1年間黙々と人のやりたがらない仕事を丁寧にやり続けていて、Discussionも積極的にしてくれるし一緒に仕事をしたいと思ったからだよ!」と。改めてチームで仕事をやるに当たり、信頼を得ることは最も重要な要素であることを認識しました。

帰国後

留学中も国内外のグラントを出し続け、幸いトータル4年間分のグラントを取ることが出来た1年9ヶ月が過ぎた頃、京都大学の戸井教授からpositionに関してお声をかけて頂きました。ボスや他のPI、周りの同僚からはグラント取れたのに信じられないと言われましたが、もう一度自分の尊敬する師の下で働ける喜びには及びませんでした。毎日研究生活であった日々から、日本に帰ると急な環境変化で、しばらくはまるでジェットコースターに乗っているような毎日でした。大学病院は臨床・教育・研究を上手くマネジメントしていく必要があります。現在帰国して9ヶ月、ようやく臨床に慣れ、研究基盤が整い、教育をする余裕が出てきました。今は毎日が楽しくてしょうがありません。留学中の仕事も徐々に目に見える形での成果が出始めました。

つらい2年間でしたが、厳しい修行無くして、大きな成果はあげられないです。(学生時代バスケットボール部での夏練習みたいなものですね。)

最後になりますが、讃樹会のご支援を足がかりに留学の機会を頂き、多くの“Achievement”を得られたことに深く感謝させて頂き、私の留学記とさせて頂きます。本当にありがとうございました。

My “Achievement”

論文：Nature Biotechnology (Under revision)；Scientific Reports, 2019；Sci Transl Med, 2018；Proc Natl Acad Sci USA, 2017；Cancer Immunol Immunother, 2017

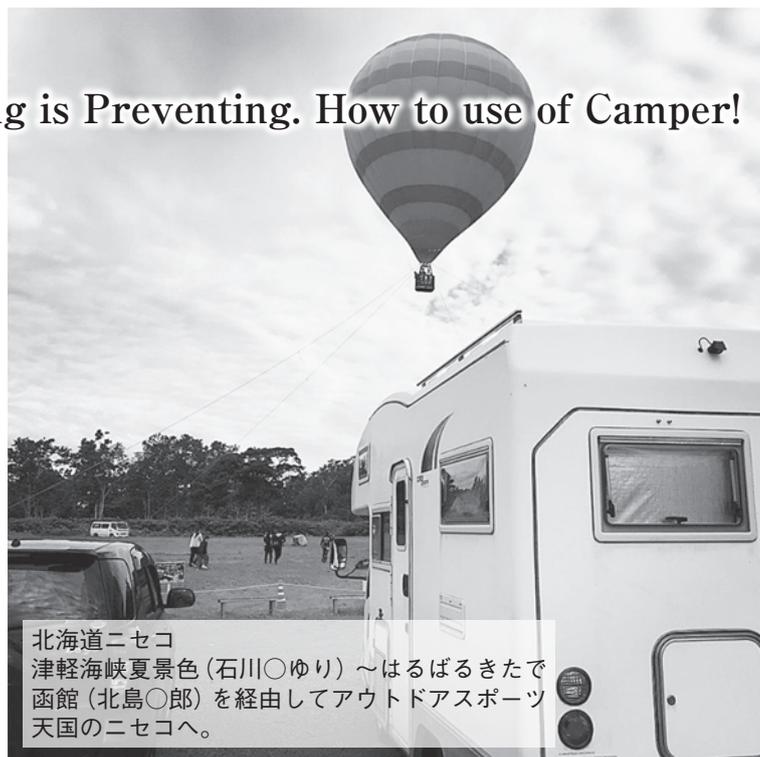
発表：日本乳癌学会シンポジウム発表(2018年)

グラントなど：日本乳癌学会第25回研究奨励賞(2019年)、日本乳癌学会優秀論文賞(2018年)、日本学術振興会海外特別研究員(2018年)、かなえ医薬振興財団海外助成金(2017年)、京都大学教育財団長期海外留学助成金(2016年)、RECHS海外留学助成(2016年)



香川大学医学部附属病院
麻酔・ペインクリニック科
岡部 悠吾 (平成13年卒・16期生)

Providing is Preventing. How to use of Camper!



「吾輩は医師である。趣味はまだ無い。」(夏目●石)
ゴルフも賭事も煙草も酒も嗜まない私に趣味、キャンピングカーについて書いてと手紙が来た。

「趣味ねえ (無え) …。」

仕方ない、ウィキペディアで検索。熱中している、詳しい分野という意味で、キャンピングカーについて書こう。

メラビアンの法則によれば、第一印象は出会って数秒で決まり、視覚 (55%)、聴覚 (38%)、言語 (7%) の順で優先される。要するに人は見た目ですべて他人を判断する。

「そだね。」(ロコ●ラーレ)

多分、私はキャンピングカーでキャンプやBBQをして人生を楽しんでいる趣味人と思われている。

「残念。キャンプもBBQもしませんから。」(波田●区)

私にとってキャンピングカーとは、南海トラフ巨大地震発生時のシェルターであり、防災の手段である。

「趣味とは違うのだよ！趣味とは！」(ランバ●ル)

南海トラフ大地震はマグニチュード8～9の規模で、およそ88年毎に繰り返す天災だ。既に昭和南海地震より74年が経過しており、令和南海地震は待った無しの状態だ。

土木学会の推計では地震や津波の直接被害が170兆円、地震保険の積立額は全く足りない。地震から身を守れても震災からは逃れられない。

正常性バイアスという言葉をご存知だろうか？多くの人は危機的状況下でパニックにはならない。いざという時、人は動けないのだ。

「そんなこと起こるはずがない。」

「自分は大丈夫だろう。」

「根拠はないけど本気で思ってるんだ。」

(レミオロ●ン)

即ち、正常性バイアスとは目の前にある危険を根拠無く過小評価しようとする思考をいう。未経験の危機的状況において正常性バイアスにより人々は危険を過小評価し、他人と同じ行動を取ることが安全と考える集団同調性バイアスにも囚われ、周囲の多数の行動に従属し被災してしまう。人生たったの90年、88年に一度の天災は未経験の危機的状況だからこそ、正常性バイアスに陥らずに行動できるように訓練する必要がある。だからキャンピングカーである。

「見せてもらおうか、震災に対するキャンピングカーの実力とやらを！」(シャア●ズナブル)



福岡県平尾台 キャンピングカーの車窓から。ミニチュアダックスフンドと共に。

【準備】

押入れの非常用物品は、有事にはおそらく使用不可能だ。

「無駄、無駄、無駄、無駄、無駄、無駄」(デ●オ)

持ち出せる場所に用意した防災グッズは、普段は邪魔な障害物。

「いざという時に買えば良い。まだ地震は先の事だろう。」

このような正常性バイアスを避けるには防災を日常生活に組み込むことが大切なのだ。まずは、キャンピングカーを災害用ストッカーとして活用しよう。

【臨時情報】

南海トラフ大地震が迫った場合、気象庁は地震臨時情報を発表するが、その後の対応は地方行政機関や個人へ丸投げだ。現状では何も決まっていない。仕事を継続？避難？どこに？

「自分やここは大丈夫だろう。」

西日本豪雨災害では広島や岡山で特別警報が出されたにも関わらず、多くの人々が正常性バイアスにより避難せずに被災した。精神、物質の両面で準備ができていなければ逃げられないのだ。目の前の危機(機器)、家具の転倒対策と防災ハザードマップで避難所の確認から始めよう。私は、家族と犬とキャンピングカーへ。

【余震、本震】

熊本地震の最初の揺れは余震であった。これを本震と勘違いし、停電が復旧したために正常性バイアスで「もう大きな揺れはないだろうから自宅で寝ても大丈夫だろう。」と考えた人々を未明に本震が襲った。倒壊せずに安全に寝られる場所、それはキャンピングカー。

【避難】

埋立地の地盤は何百年を経ても軟弱なままで、長周期振動の影響をより強く受ける。耐震基準に基づき建設されたマンションは、一度では倒壊しないが、複数回の揺れは考慮されていない。東日本大震災では首都大混乱の中、人々が自宅を目指した理由は帰巢本能のみではなく、職場に備蓄も避難場所としての機能もなく寝ることすら困難だったためだ。キャンピングカーは、ベッド、家具、家電、トイレ、シャワーや発電機付き。避難所と異なりプライバシーは確保され、感染症のリスクも回避、ペットも共に避難できる。実家、



満点星 春のピオラ、芝桜、満点星、夏のゴーヤ、朝顔、秋の紅葉(満天星、ジュンベリー)、冬のロウバイ。季節の移ろいを花で。

親戚、友人宅の庭先へ地域外避難も可能だ。

【走行性能】

「あえて言おう。カスであると！」(ギレン・●ピ)

トラック以上でも以下でも無い。横風と高速走行車には煽られるが、後付けしたクルーズコントロールで高速道路の走行車線を80km/hで定速走行すれば至極快適。

【メンテナンス】

初期費用は3点星や4輪等の外車と同程度、税金も普通車より安い。回転半径は小型車並、コインパーキングへの駐車も可能だ。ラダーフレームとディーゼルエンジンは耐久性抜群、走行距離300,000kmは余裕。実燃費は8~10km/Lで軽油も安い。

【考察】

「キャンピングカーはダテじゃない！」(アムロ・●イ)

キャンピングカーを日常使いしよう。店へ行き、非常食を買い、積み込む。乳幼児もペットも連れて家族旅行へ行こう。車内で調理、食事、泊まれば、震災時のシミュレーションになるし、宿泊代もかからない。夜に出発し、パーキングエリアで休憩すれば、高速料金は4割引、香川~青森1400kmがたったの¥20,900。家族とペットと共に北海道~九州まで全国を巡り、春~夏はスタンドアップパドルボード(SUP)や釣り、秋は紅葉狩り、冬はスノーボードに、時々子供の秘密基地としても活躍中だ。

「Providing is Preventing」、震災は忘れた頃にやって来る。備えあれば憂い無し。正常性バイアスを回避し、直ちに行動開始。

「大きな地震が起こるみたいだからキャンピングカーで寝ようか！」

「大きな地震が起こるみたいだからキャンピングカーで寝ようか！」

キャンピングカーで震災に備えた上で私個人の趣味は庭の土いじりと家族やペットの笑顔を眺める事、いつもの日常とほんの小さな幸せで十分だ。

麻酔科医は、このような思考を繰り返しながらハイリスク患者の麻酔を計画、実践する。予定調和の展開とHappy Endが大好きな人々なのだ。



香川県山田海岸 SUP 娘とイングリッシュコッカースパニエル。

「創部ものがたり」

～スキー部編～ —心は一つ!—

医療法人社団聖仁会 戸谷医院 院長
戸谷 誠二 (平成12年卒・15期生)

平成12年卒の戸谷です。学籍番号は92058でしたので創部物語を執筆する中では一番若輩者になると思います。当時顧問を務められた小林先生の助言の元、筆を執りました。

スキー部は一期生の先輩方が同好会として立ち上げ、1990年妙高高原での西医体副主幹校就任を契機に部に昇格しました。私が入学した1992年はバブル経済は崩壊したといえ、日本のスキー人口は1800万人でピークを迎え、スキーナウを録画、ロマンスの神様を聞きながら、サロモン、ヤマハのスキーやアシックス、フェニックスのウェアをアルペンで購入していた時代です。スノーボードは出たばかりで滑走禁止のスキー場が殆どで、インターネットはおろか携帯電話もなく固定電話とファクシミリが頼りでした。今やスキー人口は300万人、サロモンはアトミックと経営統合、フェニックスはオリックスが中国企業に1円で売却、アルペンが青息吐息であとは影も形もありません。当時西医体は参加者人も多く打ち上げがすさまじく、温泉街で火を吹いて歩き写真週刊誌に掲載された大学もあり

ました。そんな時代を振り返っていきたいと思います。

入学時新歓コンパには1年生が約20人(看護科未開設)で押し寄せ先輩方は費用負担が大変だったそうです。結局同期で卒業まで在籍したのは青山、松下、安藤、八田、そして私の5名だけで卒業年次はバラバラになってしまいました。もちろん「しんがり」は私です。入学当時、キャプテンの柳町さんに温かく見守られながら、内田さん、水谷さん、岡本さんの華麗な滑りに憧れ、その後を引き継がれた浅井さん、岡さん、山田さん、行政さんたちとはいつも馬鹿話をしながら、私たちに付き合ってくださっていました。岡さんの早逝を耳にした時は言葉が出ませんでした。

ラウンジで井田さん(91年入学)を中心とした愉快的仲間たちと平均在学年数を冗談交じりで計算したら6.5年!「雪は溶けて無くなるが、学校は溶けて無くならない!」。櫛の歯が欠けるがごとく春合宿から一人消え、二人消え、、、私の進級の話になると「心は一つ!」と言われる始末で、国家試験や専門医試験に合格すると「おめでとう」の言葉は一切無く、「面白くない。」「お前ならまたネタを提供してくれると思っていた。」など他人の不幸を喜ぶ本当にひどい人たちでした(笑)。

当時は学友会も資金がふんだんで、学友会所有のスキーセットが数十台あったり、ダウンヒルスキー、チューンナップ道具や、計時システムを購入していただきました。この場を借りて感謝いたします。

ところで競技スキーとゲレンデスキー(基礎)の違いを簡単に説明すると競技は速さ・効率、基礎

95年3月西医体 戸狩温泉



は美しさ・丁寧さを目指しています。日本ではスキー団体が二つあり、SIAが競技系、SAJが基礎系スクールです。規模はSIAが開業医、SAJが大学病院くらい違ううえ、しかも競技者登録はSAJに行くというねじれ現象があります。このため競技スキーの指導者を探すのには苦労していました。（ちなみに海外ではSAJクラウンといっても？で、SIAゴールド持ってるというワオ！です。）そのため西医体ではアルペンでポイント獲得するのは競技スキー経験者のみで、クロスカンントリー（XC）に至っては順位は気にせず、1年生は周囲の受け狙いで仮装して完走がやっとの「南国スキー部」でした。

そしてスキー部は95年大きな転機を迎えます。井田さんが部長に就任し西医体でのXCリレーでの入賞、未経験者のポイントゲットを目標に掲げ部がまとまりつつありました。しかし前述のように指導者に恵まれず、部の成績も上がらず「南国スキー部」状態は続きます。そんな中97年12月にSIAデモンストレーターの円浄岳さんを招いた最初の合宿は今でも話題にのぼります。雪不足で新潟でもリフトはJバーリフト1本だけで1時間以上待ち。アシスタントコーチには「みんないい板履いてるねー、でも君らのレベルだと何履いても同じ。ジャンプの板でも同じかな」と皮肉られながら、時間を有効に使うため板を担いで上がりました。（もちろん打ち上げではアシスタントコーチにはきっちり落とし前をつけました。）「四国の医学部のスキー部？まじめにやるのかな？チャライ坊ちゃん嬢ちゃんだったら次は断ろう。」と思っていた円浄さんとはそんな熱意が伝わったのか、昨年志賀高原でのOB会合宿で一緒にいます。

そして念願の西医体総合入賞、XCリレー入賞、未経験者のポイントゲットを果たしました。その後も浮き沈みはあれ、部活動が継続し今年の西医体では男子総合5位、女子総合8位、オリンピック予選を兼ねた全日本選手権に参加したりと第2期黄金期を迎えています。

振り返ると井田部長の下適切な目標設定がなされ、円浄さんの適

切なコーチングで目標を達成、部として新たな段階に到達したことでウィンタースポーツ全体が低迷する中、カービングスキーが台頭する変革期に対応しスキー部の活動の継続ができたのかと思っています。日本の現状に似ているかもしれません。

競技スキーはしばしば板やヘルメットなど用具に関する国際規定が安全確保のため変更され、規格を満たさないと出走できないことがあります。今年から西医体でもスーパー大回転には回転用の板での出走は禁止になります。このためOB会からの物心共の支援が非常に重要で、約130名のOB・OGが活動を支えています。また学生に委ねていたOB会報の印刷・発送を今年から原則PDF配信として、学業と部活動に注力できるように変更しました。

「大学で何勉強したの？内科？外科？」と他業種の方に聞かれると「医学部スキー科でした！」と答えています。勉学はさっぱりでしたが、部活動のおかげで成長でき何とか内科専門医として地域医療に携わることができています。この場をお借りして顧問の小林先生、諸先輩方、部活動でお世話になった関係者の皆様に御礼を申し上げます。

最近のスキー場は連休でもリフト待ちはほとんど無くのんびりできます。白馬八方、野沢温泉、志賀高原は外国人が多く、食事もレベルアップしています。特に夜の野沢温泉はオーストラリア人だらけで不思議な感じですよ。ふるさと納税でリフト券や宿泊補助券が貰え、子供向けにはシーズンレンタル（板・ブーツ・ストック年9,000円～）もあります。信州スノーキッズ倶楽部はオススメです。ぜひみなさんもう一度スキー場へ！そして心は一つ！



追悼



竹内博明先生
2019年1月4日に逝去されました

竹内先生に感謝を込めて

香川大学 消化器・神経内科

出口 一志 (昭和61年卒・1期生)

竹内博明先生が旅立たれて早いもので6か月が経ちました。先生が香川大学副学長をご退職された後は、消化器神経内科医局の同門会や新年会、神経内科グループの忘年会で一緒させていただき、その席上や帰路の車中で神経内科のこと、仕事のこと、趣味のことなど、先生のお話を伺うのが恒例となっていました。昨年夏の同門会を最後に、そのような機会が永久に失われてしまったことを思うと、本当に寂しい限りです。

竹内先生は昭和57年春に、新設されて間もない香川医科大学神経内科部門の助教授にご就任されました。当時、私は香川医科大学の3年生であり、高松高校の同窓であるというご縁で、先生からお声をかけていただきました。その際、教員、学生の親睦を目的とした高高会をやるという話になり、先生が代表となって大勢の参加者が集う大盛況の会となったことが思い出されます。その後、私は第3内科（現在の消化器神経内科）教室にお邪魔するようになり、卒業後は自然の流れで第3内科に入局させていただくことになりました。当時の神経内科グループは、三木先生、山田先生（現 呉中通病院神経内科部長）、峠先生（現 健康科学教授）が和気あいあいと診療、研究に励まれており、私のような新米にも自由に仕事をさせていただける環境がありました。これには、正に竹内先生のお人柄が反映されておりました。

竹内先生とは、何度も学会に御一緒させていただきましたが、特に印象に残っているのはリオデジャネイロで開かれた国際学会でしょうか。24時間の長旅と時差12時間のために、到着直後に行われた開会式では2人とも爆睡してしまったり、ブラジルの1人前の食事は日本の2人前相当でとても完食できなかつたり、学会後に訪れたイグアスの滝では水しぶきで全身ずぶ濡れになったりと、世界の広さを知る良い機会になった

ことが思い出されます。また、ロンドンへの単身留学中には、研究室までわざわざ御訪問いただき、励ましのお言葉をいただいたことも忘れられない思い出です。

竹内先生からは、難病揃いの神経内科の患者さんを診るにあたり、多くの事柄を教えていただきました。医師が良いと考える治療を、患者さんも本当に望んでいるとは限らない。一人ひとりの患者さんを詳細に検討し、その記録を正確に残すことが将来の診断方法の改善や新しい治療法の開発につながる。研究は小さなことを少しずつ積み上げていく作業であり、決して一人の力で成しえるものではない。若かった頃の私にはそれらの意味が十分にはわかりませんでした。年を重ねるにつれ、先生のお考えの真意がようやく理解できるようになりました。

竹内先生が香川医科大学に赴任された37年前、香川は神経内科不毛の地でした。そのような中で始められた「香川神経内科の集い」は県内の神経内科医が症例検討を行い、施設間の親睦を図る場として定着し、現在も「香川神経疾患研究会」と名称を変えて県内の神経内科医のスキルアップに役立っています。また、先生が深く関わった医学部と工学部の連携による複合医工学国際会議も、来年は高松で開催されます。先生が愛情を注がれた香川の脳神経内科は、一步一步着実に成長しており、今後もその歩みを止めることは決してありません。竹内先生とのお別れに際し、われわれ門下生一同は、先生が強固な礎を築かれた香川大学脳神経内科を、皆で力を合わせてさらに発展させていくことをお誓い申し上げます。竹内先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。追悼の言葉とさせていただきます。竹内先生、本当にありがとうございました。



Series 教授の横顔

聞き手／名誉会長 濱本龍七郎
於 管理棟3F 応接室

医用化学

和田健司教授

日時 2019年7月31日(水)
12:30~13:30

濱本 和田先生は平成25年4月に就任されました。化学の教授は初代が倉橋研吾先生、二代目が小林良二先生で和田先生は3代目となりますね。

和田 はい。今年で7年目となり、ようやく教育研究が落ち着いてきて、これからいろんなことをやらないといけない時期でもあります。

濱本 先生は京都大学のご卒業ですが、留学以外はずっと京都におられたのですか。

和田 そうです。京都大学の工学部石油化学科を出まして、大学院も同じところ。そのまま准教授まで務め、途中1年間、カナダのプリティッシュコロンビア大学で勉強させていただきました。

濱本 ご出身はどちらですか。

和田 生まれたのは福井県ですが、父親の仕事の関係ですぐに関西に移り、地元の兵庫県立伊丹高校に通いました。

濱本 大きな京都大学から香川大学に赴任された時、どんな印象でしたでしょうか。

和田 京都大学は化学系分野が非常に多く、特定の分野で世界のトップに立つ研究の姿勢を要求されますし、かなり絞られた分野の講義を担っていました。一方、香川大学医学部では、基本的ではありますが化学の全分野をカバーしないとイケないという任務をいただきました。

濱本 他学部にも教えに行かれていますか。

和田 医学部は勿論ですが、全学共通教育が当たった年には他学部の学生を教えることもあります。

濱本 御自身のライフワークとなる研究はどのようなものですか。

和田 ずっと触媒というものに関わってきました。学生時代は石炭、天然ガス、重質油等を扱っていましたが、その後は医薬品や医薬品原料等に扱う対象が変遷し、最近では生命科学に近い、医学と工学あるいは医学と農学の接合領域の結節点となるような仕事に舵をとっています。

濱本 それは有機化学ですか。高分子化学になりますか。

和田 触媒学というのは総合学問です。私が扱っている反応は有機合成化学に該当しますが、固体の触媒を中心に用います。こうした固体触媒の解析となると表面物理の世界が関わってきます。我々も時には兵庫県にあるスプリング8という大型放射光施設に行って物理の専門の方に教えて

もらいながら解析を行ったりして、それで初めて、有機反応がなぜ起こり、どうしたら上手く制御できるのかわかるようになります。従って、化学だけに限らず、幅広い範囲の知識を着実に身につけないと前に進まない、そういうタイプの仕事です。

濱本 研究はどのように進めておられるのでしょうか。

和田 工学部や農学部と違って、学生が自動的に研究室に入ってくる仕組みではありませんので、現在は工学部の博士や修士の学生を連携している研究室から迎え入れて、共同研究を行っています。

濱本 卒業論文を見ておられるのでしょうか。

和田 卒業論文、修士論文、博士論文も見ます。最近医用化学講座の助教として、バイオマテリアルズを研究されている栗原先生に加わっていただきました。彼の今の主なテーマが癌をターゲットにしたイメージング材料を作る、あるいはドラッグデリバリーシステムのための材料開発です。おそらく、工学部の基礎及び臨床の先生方とかなり重なるところがあります。一方で私の方から見ると、彼が使っている材料というのは我々と共通点があります。そうすると、私自身の新しい成果が彼の新しい材料に機能してそれが工学部の先生方との共同使用につながっていくのではないかと期待しています。

濱本 京都大学はノーベル賞が多いですけども、その背景はなんだとお考えでしょうか。

和田 研究というのは99%は失敗ですので、1%以下の成功に掛けるということで、自分が払った努力が無駄になるということに耐える必要があります。研究のためにはある意味「鈍感力」が必要と考えています。成功率が低いと自分で予測して試みに消極的になるのではなく、たとえ失敗してもそれをしっかり受け止め、「失敗しましたわあ、次何やりましょう」みたいに次の展開を積極的に考えられる学生は強いと思います。香川大学の学生はそれを持っているなど実感することがよくあります。これから、もしかしたら香川大学がノーベル賞の供給源になるかもしれません。

濱本 鈍感力が大事ということですね。学生についてもう少しお聞かせ下さい。

和田 香川大学医学部の学生は、やはり優秀というのが、第一印象としてあります。さすがに厳しい入学試験をかくぐってきた人たちだけに、非常にクオリティが高い、基本的な学力を十分にもった学生だと思っています。医学部で身に付けるべき知識量が膨大になっていますので、教員が道筋を示し、後は自分でしっかりと勉強していくことが要求されます。多くの学生は、それにしっかりと応えて、さらに国際交流活動やクラブ等で活躍しています。ただ、入学後に目標を見失っている学生もゼロではありません。我々教員は、学生の状況をしっかりと把握して、入学後も勉学意

欲を継続できるように、共に一緒に考えていくことが大切な仕事です。

濱本 講義はどのようになりますか。

和田 最初は物理化学からスタートし、次に有機化学に進みます。物理化学と有機化学の教科書2冊を一通りやり、さらに基本的な分析化学の手法を学び、最後に生化学反応機構といまして、糖の代謝や脂肪の β 酸化等の反応がどのような理屈で進行しているかを説明できるようになる、そこまでをやっています。ただ、それを1年2ヶ月、45コマという非常に限られた時間の中で行わないといけないので、重要箇所をしっかりと教えて、後は学生諸君が自分で興味を持って勉強してもらうというスタイルになります。

医学部のカリキュラムはかなり厳しいですが、それは最低限の要求です。試験に合格さえすればよいという考え方ではなくて、常にオーバーパフォーマンスで、それ以上の力を発揮することを要求し続ける。特に化学といった自然科学は、いつ役に立つかわからないけれども、確実に将来役に立つ場面があります。いろいろなことに興味を持って、学生でないとできないということにチャレンジしてほしいです。

濱本 オーバーパフォーマンスですね。結局、背伸びをしないか伸びないということですね。

和田 社会に出ると失敗を恐れずに背伸びするということが難しくなりますが、大学生は許されます。背伸びをした分だけ成長すると思います。

濱本 こちらに來られて、国際交流をいつから始められたのですか。

和田 実は前任のところで留学生のお世話をする役目などを担当していた関係からか、こちらに來てしばらくしてから、国際交流委員長の徳田先生から、香川大学の国際交流の特色というのを教えていただきました。そして3年ほど前から、私が委員長を務めることになりました。

濱本 最初はカルガリー大学だけでしたが、だんだん増えてきましたね。今はどこが中心なのですか。

和田 今は、中国、東南アジア、そしてイギリスが中心です。東南アジアの特に重要なパートナーは、ブルネイ・ダルサラーム大学とタイのチェンマイ大学です。ブルネイはボルネオ島にある人口40万人程度の小さな国ですが、石油・天然ガスを産出する裕福な国です。そこにおける香川大学のプレゼンスというのは大変大きく、日本の大学と言え第一に香川大学の名前が挙がってきます。今年の夏には6名の学生が派遣されており、春には研究インターンシップとして4名～6名程度派遣しています。一方、ブルネイからは12月に3週間実施している冬季医学セミナーに毎年10名程度、また生命科学分野の研究インターンシップとして、6名～7名程度をそれぞれ4ヶ月弱受け入れています。

また、中国とは、河北医科大学、中国医科大学、第四軍医大学と提携を結んでいます。主に河北医科大学に1～2年生を中心に毎年、5名～8名程度の学生を派遣し、15名

程度を短期で受け入れています。

濱本 アジアに広がっていますね。

和田 来年にかけて、ミャンマー、カンボジア、マレーシアの大学などの国々と協定締結が実現する見込みです。さらにベトナムの175軍病院からも人材を受け入れています。このように、アジア全域との交流が広がっています。

イギリスでは、3大学、ニューキャッスル大学、グラスゴー大学、ロンドン大学セントジョージ医学校と交流があります。現在、イギリスに臨床実習のために留学することは大変狭き門です。しかし香川大学は先方との密接な関係から特別な枠を確立していて、今年も春にニューキャッスル大学に4名、ロンドン大学に1名が派遣されました。ほぼネイティブ並みの高い英語力が要求されますが、それを軽々と乗り越えるような学生がかなりいます。

讃樹會からはイギリスの派遣学生に対しては5万円、東南アジアへの派遣学生に対しては3万円の補助を全員がいただいていますので、それが彼らにも経済的な面での大きな支援になるし、讃樹會とつながる一つのきっかけとなっています。ありがとうございます。

濱本 国際的に活躍する学生が香川大学医学部に多く居るのは驚きです。

和田 香川大学の特色の一つになりつつあります。外国で臨床実習を行う夢をもった高校生が、香川大学を目指すことも実際あるようです。提携大学はいずれも特色のある医学部を持っています。

濱本 先生のライフワークの一つですね。

和田 そうですね。今、大学は一つの評価軸でランキングされる傾向にありますが、香川大学は国際交流が盛んで、あるいは海外で活躍できるような人材が育成できるという、他とは違う特徴を持っているところが高校生にアピールできるのではないかと思います。

濱本 先生は平成13年にカナダに行かれています、留学はいかがでしたか。

和田 視野を広げる大きなきっかけになりました。海外で生活し勉強するのは、基本的にトラブルの連続ですが、それを厭わないという考え方を持てるようになり、多様な考え方の違いを乗り越えて何かを成し遂げるという体験を得ることができます。おそらく学生諸君にとって、さらに一回り人間を大きくする機会になると期待しています。

濱本 これから国際交流をどう進めていかれるのでしょうか。

和田 優秀な学生が羽ばたく重要な機会の一つなので、交流提携校との連携を切らさないこと、それに加えて、大学院生、若い医師、研究者の交流がこれからの鍵になると思います。せっかく若い学生の国際交流が盛んであるのならば、それを活かす形でこういった提携校と手を結んで、国際的な共同研究も盛りあげていきたいと思っています。実際、そういった活動がいろんな医局や研究室で行われていますので、スムーズに運営できるように我々がサポートしていきたいと思っています。

濱本 卒業生や讃樹會に望まれるものは何でしょうか。

和田 大学や学部力は卒業生の方々の活躍によるところが大きいです、同窓会の力が大学の力に直結するところがあると思います。いろんな年代の方が集まって活動される機会というのは、極めて重要です。香川大学医学部は比較的若い学部ですが、重要な地位の方や活躍されている方が多いという印象を持っています。創立当初の、言ってみれば大物揃いといますか、そういうところが出ているのかなと私は考えています。しかし、若い先生方との連携、連絡をとるとなると、なかなか大変です。例えば外国の先生が来られた時に関わりのある卒業生に声を掛けようとするのですが、居所が不明で連絡が困難な場合があります。是非とも、若い先生方がユニオンといますか、何かの機会に集まって情報交換して、お互いに助け合いつつもまた刺激合って力を伸ばしていくような場を構築していただけたらと思います。卒業して一旦は香川県を出た先生も、香川とつながるという気持ちは常に持っておられると思いますし、香川で人脈を作ることができるということは大きいと思います。

それと、最近、在学生の様々な活動に対してご支援いただける仕組みを作ってくださいまして、これが国際交流だけではなく、いろんなクラブ活動の活発化につながっています。やりたいことがあった時に、讃樹會が助けてくれることは彼らにとって大きな励みになっていますので、これからも学生のチャレンジをサポートをお願いしたいと思います。

濱本 大学や医学部に望むものはありますか。

和田 私も大学の中の人間ですから、望むというより望まれて何とかしないとイケない方ですけども、香川大学全体というのは、大変オープンな雰囲気です。どの先生にも気兼ねなく声をかけて、いろんな相談ができるという環境であり、大事にしたいと思います。

濱本 農学部と共同研究をされていますか。

和田 常に一緒にセミナーを行ったり、国際交流事業を一部農学部と一緒に実施しています。最近では、医学部で受け入れたブルネイの学生の一部について、農学部での研修に参加させていただいています。そういう意味で常にコンタクトをとっています。

濱本 工学部と農学部ではどちらが先生にとって近いですか。

和田 研究内容としては工学部ですけども、国際交流という点では農学部がすごくアクティブですので、一緒にやらせていただこうと思っています。農学部は、かなりの割合の学生が海外での研究活動を経験していて、それが強みになっています。伝統を受け継いで、更に新しい伝統を作っていこうという、そういう気概をいつも感じますので、我々もそれを見習いたいと思います。

濱本 本日は、先生のご専門や、大学への熱い思いをお聞きでき大変感動しました。お忙しい中、お時間を頂戴し誠にありがとうございました。



教室便り

令和元年7月入稿

神経機能形態学

スタッフは、三木崇範（教授）、鈴木辰吾（准教授）、太田健一（助教）の3名です。鈴木は今年度講師から准教授に昇格しました。解剖学を教育し、神経科学を研究しています。いわゆる「I解」です。学生には、解剖学とは何かや勉強の仕方などに始まり、ヒトの体の構造と機能をシステムとして（分解しないで）観ることに力点をおいて解剖学を教育しています。解剖学以外は分子・ミクロの目で人体を見ることを教授します。個体から分子までの幅広いスパンを双方向性に観ることのできる能力を養ってもらいたいと願っているからです。

研究は、ストレス曝露による脳発達障害・機能の歪が生じるメカニズムを掘り下げて探求しています。今、幼い子供を取り巻く環境は決して良好とは言えないばかりか、発達障害や不登校などが深刻な社会問題となっています。これらの原因の一つを脳発達期の神経回路網形成障害と推測しています。現在、スタッフ全員が科学研究費を獲得し、周産期産婦人科学と小児科からの大学院生を受け入れ精力的に研究を進めています。（三木 記）

組織細胞生物学

私、荒木が組織細胞生物学の教授となり13年目となりました。教室スタッフは、私のほか江上講師、川合助教の教員3名、解剖技術職員1名、事務補佐員1名の5名体制で、教育と研究に当たっています。教育では、医学科の「解剖学Ⅱ（骨学、組織学）」に加え、今年度より臨床心理学科の「解剖学入門」、全学共通科目の「文系学生のための解剖学」も担当しています。研究は、蛍光タンパク質融合機能分子発現によるバイオイメージングや顕微鏡下オプトジェネティクスを駆使し、マクロファージやがん細胞におけるエンドサイトーシス（特にmacropinocytosisとphagocytosis）の分子メカニズムを解析しています。現在、大学院生1名が在籍しており、今年度の学位取得を目指しています。学部学生も数名が研究室に出入りし、研究をしたり勉強をしたりしています。楽しく明るい雰囲気の研究室ですので、卒業生の皆さんも気楽に来てください。大学院生、共同研究も大歓迎です。（荒木 記）

分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称が脳神経生物学から分子神経生物学に変わって6年目を迎えています。昨年10月

に奈良医大より助教1名（高橋弘雄）が着任しました。また、3月には香川医科大学としての開学直後からのスタッフである教務職員（豊島哲彦）が定年を迎え、悠々自適の第2の人生へと踏み出していきました。現在スタッフ2名と3名の大学院生に加え、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明を主目的に研究をおこなっております。昨年度は、AMEDの橋渡し研究支援シーズに採択されて進んでいた眼科さん・脳神経内科さんとの共同研究から、神経変性疾患であるパーキンソン病の新たな診断指標となり得る現象が見出され、特許申請に至りました。また、私たちが樹立した精神神経疾患モデルマウスの解析からは、ドラッグリポジショニングの観点からの興味深い知見が得られています。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを掲げ所に、上記のような臨床の先生方との共同研究も発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）

自律機能生理学

自律機能生理学では、2019年4月1日付けで新たな准教授を迎え、教授1名、准教授1名、助教2名、事務補佐員1名の体制で生理学の教育と研究に取り組んでいます。さらに、新年度に入って医学部生も自主的に研究活動に参画しています。

2015年4月入学の大学院生は、「血液凝固第XI因子が引き起こす血管平滑筋細胞の細胞内カルシウムシグナルと遊走能の促進」に関する研究で医学博士を授与され、2019年3月大学院を修了しました。教室では、血液凝固因子が作用する細胞膜受容体の研究を推進していますが、大学院生の研究もこの一環として実施したもので、第XI因子が受容体を介して血管に作用することを初めて示した研究となりました。教室では、臨床応用を目指す“トランスレーショナル生理学”を進めています。新たな准教授も加わりさらなる発展を目指しています。

医学教育においては、医学科2年次の生理学Ⅱと3年次生の生理・薬理実習を主に担当しています。加えて、早期医学実習Ⅰ・Ⅱ、課題実習、医学実習Ⅱにおける研究室配属での学部生の科学的素養の育成にも励んでいます。生理学教育に学生による講義を取り入れて今年で3年目となります。消化器生理学5コマの講義では、教科書的知見を学生が学生に対し学生の視点で講義を行います。これを教員

が補足することによってより高い教育効果が得られることを期待しつつ、取り組んでいます。(平野 記)

薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。2019年の薬理学教室の状況を簡単にアップデートさせていただきます。

昨年、准教授であった人見浩史先生が関西医科大学iPS・幹細胞再生医学講座の主任教授として赴任されましたので、現在は中野大介先生が准教授に昇格し、新しく加わった助教のラフマン・アサダ先生の合計3名で教室を運営しております。教員以外では、日本人研究員1名、外国人研究員1名、大学院生(日本人3名、中国人2名、バングラデッシュ人1名)、実験補佐員4名に加え、毎年カリフォルニアより数名の学生が短期留学で加わっており、また、本年はブルネイとエジプトからの学生さんも来られて、楽しい雰囲気の研究を進めております。

研究方針としましては、少数精鋭で研究活動を続ける必要があるため、研究テーマを大きく5つに絞って研究を進めることとしています。1. 癌に対する創薬活動(AMED-ACT-MS, AMED創薬ブースター)、2. 腎臓病に対する創薬活動(科研費C)、3. 組織におけるナトリウムを中心とした電解質の役割の解明(科研費B, ソルト財団プロジェクト研究)、4. 社会貢献や外部資金獲得のための共同研究(希少糖、長命草、SGLT2阻害薬、ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬、PHD阻害薬、抗酸化抗体などの薬効試験)、5. その他、楽しむための研究です。特に、昨年よりスタートしました「5. その他、楽しむための研究」では、美ら海水族館との「イルカとクジラの腎不全メカニズムの解明と薬の開発」やJAXAとの「宇宙研究棟“きぼう”において飼育したマウス」についての共同研究などを実施しています。

「社会の貢献につながる世界最先端研究を、皆で力を合わせて進めていく」という教室理念のもと、日々精進して研究を進めていく所存ですので、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。(西山 記)

医用化学

医用化学教室が発足して今年で7年目に入りました。この1年間の当教室の最も大きな話題として、昨年12月に新たに栗原亮介助教が加わったことが挙げられます。引き続き和田教授が、専門基礎科目である医用化学IおよびII、自然科学実習(化学)を担当しておりますが、栗原助教が加わることでより綿密な学生指導が可能になりました。さらに総合生命科学研究センターの中北慎一准教授のご協力を得て、教育内容のさらなる充実を図っています。また和田教授は引き続き医学部の国際交流を担当しておりますが、医学科生の海外での臨床実習や研究インターンシップに対する関心がこれまでにない高まりを見せており、嬉しい悲鳴をあげています。

研究について、医工連携研究として、医薬品原料合成用

の新しい触媒の開発と、分光イメージング法の活用に注力しております。大変嬉しいことに、触媒開発に従事している学生が、前回に引き続き学会でポスター賞を授与されました。また、分光イメージング技術は実用化に向けた最終段階に至っており、西藤翼技術補佐員(令和元年7月から創造工学部に所属替)を迎えて、いわゆる「死の谷」を乗り越えるべく頑張っております。さらに新加入の栗原助教が中心となって、ドラッグデリバリーシステムや分子プローブの開発を図っております。

このように、少しずつではありますが、教育・研究の双方で改善と展開を図っております。今後も引き続きご支援下さいますよう、どうかよろしく願い申し上げます。

(和田 記)

分子細胞機能学

分子細胞機能学では中村隆範教授、小川崇助教、野中康宏助教の3名の教員と大学院生1名と事務職員1名の計5名が在籍しています。教育面では主に内分科学講義・実習を担当しております。また、昨年度から今年度にかけて、課題実習で医学部学生3名とブルネイ・ダルサラーム大学との国際交流により留学生1名を受け入れ、交流を交えながら研究を指導してまいりました。その期間は普段の倍に所属員が増えたため笑顔でいっぱい賑やかな状況でしたが、現在は期間が終了しいつもの落ち着きを取り戻しております。つい先日以前早期医学実習で本講座に来ていた学生が講座を訪ねて来てくれましたが、相談はもちろん何も無くても気軽に立ち寄れる研究室の雰囲気をこれからも大事にしていきたいです。

研究面では主に新規細胞増殖促進因子の同定やガレクチン等の糖鎖認識レクチンの生理機能について研究室員で協力し、さらに学内外との共同研究に支えられながら研究を進めております。私自身も大腸がんにおけるガレクチン-4の機能に興味を持ち研究を行っており、苦戦しておりましたが少しずつ変わった機能を明らかにしつつあります。現在この作用機序を探っており、これらの結果を発信していきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。(小川 記)

腫瘍病理学

腫瘍病理学では、4月に松田陽子教授が着任し、『研究』、『診断』、『教育』を3本柱とした新体制での教室運営が始まりました。

研究面では、松田教授のご専門である膀胱癌研究、老化に関する研究に加え、当教室前教授であり、本年度より本学理事・副学長(教育担当)に就任された今井田克己先生のご専門である肺発癌、毒性病理学の研究も継続しています。6月には毒性学会(徳島)にて、当教室より横平准教授、山川技術職員が招待講演を行います。さらに、臓器に関わらず、腫瘍に関する他施設との共同研究は積極的に参加したいと考えております。

病理診断業務では、複数の近隣中核病院の診断、本学附

属病院や他病院の病理解剖業務を担当しており、臨床の先生とのコミュニケーションを大切にしながら、丁寧で細やかな診断を心がけています。

教育面では、1、3年生の学生研究員を迎え、病理診断や研究の指導を行っています。また、大学院生、研究生も募集しています。癌研究、病理学について、ご興味のある方は是非当教室にご連絡ください。(成澤 記)

炎症病理学

炎症病理学教室は、平成25年に上野正樹が教室を主宰して6年が経ち、現在、千葉陽一講師と村上龍太助教の3人で教室運営を行っています。さらに、名誉教授の阪本晴彦先生が客員研究員として、松本晃一先生が協力研究員として研究と教育と診療に携わっています。一方、麻酔学の植村直哉先生と築瀬賢先生、小児外科学の藤井喬之先生と形見祐人先生、脳神経内科の野中和香子先生、精神神経医学の木戸瑞江先生、小児科のインモン先生が医学博士修得を目指して研究に従事あるいは始動し始めています。研究テーマに関しては、個々の主体性を重んじながらも、認知症の病態解明とその予防と治療に関する研究を重点課題としています。さらに、新学術領域研究の分担者として若手研究者の研究支援も行っています。また、今年の7月には、高松にて老化促進モデルマウスの学会を主宰する予定です。讃岐の丘から世界に向けて研究成果を発信し続けるよう、教室員一同努力していきます。(上野 記)

免疫学

免疫学講座がスタートして8年度目となりました。現スタッフの教員3名、技能補佐員1名、アシスタント1名で、研究・教育を進めています。また、歯科口腔外科の宮寄先生と高尾先生が、大学院生として研究を行っています。宮寄先生は、日本口腔科学会において研究成果を発表し、学会賞若手優秀ポスター賞を受賞しました。高尾先生は、希少糖を用いる研究を始めています。彼らの活躍に期待しております。さらに昨年度は、医学科3年次の課題実習では2名、1年次の早期医学実習Iでは1名が本講座で実習を行いました。医学科の学生に対して研究への興味を惹き付けるように、努力を続けてまいります。

研究の特色としては、財賀助教の尽力によりノックアウトマウス、およびノックインマウス系統を作成できる環境になりました。新しいマウスの解析を実施中です。香川大学発の新しい研究に向けて、成果を積み上げていく所存です。

今後ともよろしく願いたします。(星野 記)

国際医動物学

国際医動物学教室は准教授、助教、事務補佐員が各1名で構成される小規模な半講座です。マンパワーではなく創造力を絞り出して、マラリアの撲滅を目指した基礎研究を進めています。昨年に引き続き、科研費と香川大学研究費

を原資として、香川大学が研究をリードする希少糖によるマラリア撲滅の可能性を評価しています。また、6月に、ヒト血清を用いない熱帯熱マラリア原虫の生殖母体培養法を学術論文として発表しました。この方法を基に蚊体内期の培養法を開発することで、蚊体内期の薬剤標的因子の同定や、マラリアに対する生ワクチンの大量製造法の確立を目指しています。

学部生への教育については、昨年度、3年生1名が課題実習を、2年生1名と1年生1名が早期医学実習を修了されました。本年度は、引き続いて参加された1名に加えて2年生が1名、合計2名が早期医学実習に参加されています。本年度も3年生の講義・実習以外の教育にも力を入れていく所存です。(田中 記)

分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名で微生物学の教育研究を行っています。大学院生は3名(1名はバングラデシュからの留学生)所属しています。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。本年度から新設された臨床心理学科2年生の微生物学の講義も担当する予定です。将来、感染症診療に当たる際に必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内フローラの破綻と健康維持に関する研究を行っています。次世代シーケンズによる腸内フローラの解析が容易になったことで、腸内フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。(桑原 記)

衛生学

2018年3月より当教室も准教授の宮武と助教の鈴木の2人体制になりました。今年度は新たに大学院生2人が加わり、6名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援、熱中症に加え、行政と協同で子どもを対象にした非認知スキル向上事業を行っています。また、小児科とミャンマーにおける国際協力事業、国際教育部と医療従事者向けの英語学習プログラムの作成に関する研究も行っています。衛生学の枠を超えて、他科や多職種と協力することで研究や社会貢献の幅を広げています。

さらに、地域、職域、学校を対象に、生活習慣改善支援のための健康教室や子育て支援として子育てセミナーを県内各地で実施しています。昨年度は、あわせて96回2,000名余の方に参加していただきました。

今後も引き続き、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めていきたいと思っています。(鈴木 記)

公衆衛生学

メンバーについて、平尾、神田の常勤2名に加え、社会人大学院生5名（うち2名は本学麻酔科よりの出向）、バングラデシュからの留学生1名で賑やかに活動しております。教育では、4年時の授業でe-learningを導入して3年目となりました。学生の反応は概ね好評で学習効果も上がっているようです。また、香川県と共同で、昨年からは行政医師、社会医学系医師確保策として、医師、医学生に対する懇談会、香川県庁での実務演習、社会医学セミナーへの参加助成等を行っています。

学術活動としては、香川県小児生活習慣病調査、香川県民健康栄養調査をはじめとする地元密着型の研究、ウイルス性肝炎等各種疾病の医療経済評価、ASEAN諸国における健康評価等の研究を行っています。また、終末期における死の質の評価、高齢者の体力推移と維持に関する研究、アタッチメントと育児バランスに関する研究も行っています。新分野として、緩和ケアにおける鍼灸治療の効果に関する研究などにも取り組んでまいります。（神田 記）

法医学

2018年度の学術活動は、第24回国際法医学アカデミー会議（法医学会学術全国集会と同時開催：福岡；6月）でジャーナル、田中、高倉、木下が、10月の法医学会学術中四国地方集会（山口）ではジャーナル、伊藤が、12月の中毒学会中四国地方会では田中がそれぞれ発表しました。また、9月には第1回日本法医病理学会を高松（レクザムホール）で開催し、アルバニアからゲストをお招きするなど、盛会のうちに終了しました。

教育に関しては、8月末～10月半ばの系統講義以外にも、警察学校での講義や日本医師会の検案研修会の実施に協力しています。人事面では、2018年4月より山下忠義さんが技能補佐員として加わりました。9月から7か月間、科目等履修生として小澤雄真さん（高松海上保安部）を受け入れました。また、5年間、教室の業務に貢献していただいた高倉彩華さんが結婚のため9月末で退職されました。2019年2月から木村泰彦先生が協力研究員として加わりました。3月には伊藤明日香さんが大学院を修了しました。剖検実務に関しては、教室員全員で協力して行っています。今後とも、讃樹会の先生方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（木下 記）

医学教育学

医学教育学講座の近況をご報告申し上げます。

昨年度の医学教育学講座に課せられた最も重要なミッションは医学教育分野別評価において本学が認証を受けることにありましたが、これに見事パスいたしました。この場をお借りして結果をご報告させて頂くとともに、ご協力頂きました皆様に感謝申し上げます。この医学教育分野別評価は、医学部の医学教育レベルが国際基準に照らして適合しているか否かを外部評価機関（日本医学教育評価機構）

が書類と実地調査を行い評価するものです。2018年10月29日から11月2日までの5日間に渡って7名の評価委員が本学を視察した結果、香川大学医学部の教育レベルが多くの特長で国際基準に適合しているとのこと評価を頂きました。その総評の中では、地域医療の振興、アクティブラーニングの推進等が特に評価される一方、学生やカリキュラム評価のあり方等については問題点も残っているとの指摘も受けました。今後は指摘された点を各講座と協力しながら改善していきたいと考えています。今回の認証を受けた期間は約7年間であり、7年後には再評価を受けることになっています。7年間でさらに良いカリキュラムの編成を目指して努力していきたいと考えています。教育改革は大学の内外を問わず、讃樹会の皆様のご協力抜きに成し遂げることはできません。今後とも讃樹会の皆様の一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。（坂東 記）

血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹会のみなさまに血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され5年目となりました。学内外の数多くの重要な業務をこなされています。教室ならびに診療科の運営はもちろんですが、副病院長および医療安全管理部長として附属病院の要職を担っておられます。現在の教室メンバーは21人ですが、大学院生が4名と増加し、教授のライフワークである癌免疫療法を中心に研究が進んでいます。門脇教授自らがイニシアチブをとられ、ウイルスを用いた癌免疫療法の実用化に取り組んでいます。外来診療は、血液内科5名、呼吸器内科5名、膠原病・リウマチ内科6名で担当しております。県内外の讃樹会会員の皆様のご支援により、3診療科で3,900名（内紹介患者：563名）、入院患者544名を診療させて頂いております。

さて、来る2019年12月1日（日）に『第121回日本内科学会四国地方会』および『第61回四国支部生涯教育講演会』をレクザムホール（香川県県民ホール）にて門脇教授が開催致します（<http://www.naika.or.jp/meeting/shikoku/>）。良い学会となるよう教室員一同全力で準備を進めております。ご興味がおありの先生は是非お運びくださいますようお願い申し上げます。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹会会員の皆様のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。（土橋 記）

循環器・腎臓・脳卒中内科学

4月より南野哲男教授をお迎えして4年目に入りました。今年度は新たに6名の内科専攻医を迎えました（循環器グループ 蔵下先生・坂本先生・綾井先生・戸田先生、腎臓グループ 青木先生・志賀先生）。心臓グループ、腎臓グループ、抗加齢血管（脳卒中）グループが緊密な連携を取りながらトータルな医療を提供しています。また、循環器ホットライン開設・救命救急センターとの連携を行い、地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や腎移植患者に対する高

度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。

昨年度は日本循環器学会四国地方会、日本心臓リハビリテーション学会四国支部地方会を成功裏に主催することができました。今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が一丸となって取り組む所存ですので、今後ともよろしく願いいたします。(祖父江 記)

消化器・神経内科学

讃樹會の皆様には消化器・神経内科学講座の近況をご報告申し上げます。

正木勉教授が就任して10年を越えました。この間、医局員数は増加し、香川県内の関連病院にも人材を派遣し、香川県の地域医療を支える一助となっております。

消化器内科では早期消化器癌の発見、また、それらに対する内視鏡的治療、経皮的局所治療などを積極的に施行しており、良好な成績をおさめています。また、進行消化器癌に対しては、新たな抗がん剤や分子標的治療薬による治療にも積極的に取り組んでいます。

また、神経内科ではバイオサイエンスの医学へ応用が進んだおかげで多くの原因分子が特定され、治療への応用が進んでいます。

また、教室を挙げて外部資金の調達に取り組んでおり、科学研究費の獲得者数も年々増加しています。

今後とも正木教授を筆頭に香川県の地域医療の支えとなるよう、医局員一同、鋭意努力いたしますので、讃樹會会員の皆様にはより一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(鎌田 記)

皮膚科学

当科は、窪田泰夫教授以下、講師1名、助教2名からなる教室です。当科のメインテーマは、「皮膚は心の鏡」です。患者とのコミュニケーションを大切にすることが、皮膚病に隠された患者の懊悩への理解、共感、QOLの改善に結びつくと考えています。

臨床：一般診療に加え、アトピー・乾癬・膠原病・遺伝・腫瘍・レーザーの専門外来を開設しています。皮膚悪性腫瘍、アレルギー、レーザーの専門医が在籍しています。

臨床研究：乾癬やアトピー性皮膚炎における、外用ステロイドの副作用を軽減する治療法を我が国で確立しました。また、にきびに対する化粧指導の研究は、米国のにきび診療ガイドラインに引用されました。

基礎研究：皮膚における活性酸素の役割をテーマとして進めています。

社会医学研究：香川県の島嶼部および山間部を対象にした皮膚がん無料相談を行なっています。

同窓の先生方のお役に立てることがありましたら、ご連絡、ご紹介をいただければ幸いです。(石川 記)

小児科学

当講座は就任6年目となる日下隆教授のもと「楽しくなければ小児科ではない」をモットーに香川県の小児医療を支える人材の育成や各医療機関との診療連携体制の構築に日々取り組んでいます。

卒後臨床研修に関しては子供と共に発育する楽しみを臨床現場で獲得すべく、小児科医としての喜びを体得できる研修を心掛けています。今年は卒後3年目の小児科専攻医として4名(竹内先生、土田先生、西岡先生、野口先生)、初期研修医1年目の小児科コースに3名(今上先生、品部先生、豊嶋先生)の先生方が研修を開始されています。昨年行われた小児科専門医試験では2名(岡岡先生、入江先生)が見事合格され、小児科専門医として新たな一歩を踏み出しています。

今年5月には、『IPOKRATES Japan 2019 conference』～小児・新生児領域における若手医師、研究者のための国際教育セミナー～が高松で開催されました。世界的に著名な教授、臨床研究者らを講師として迎え、国内外から多くの若手医師が参加し、世界レベルの知見を直に学ぶとともに国際的な交流を深めることができました。

研究においては新生児脳酸素代謝グループ・黄疸・薬物代謝グループ・乳幼児運動発達グループがそれぞれ精力的に研究を行っています。

今後も「成熟した小児科医」を目指し、日々精進していく所存でございますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。(小西 記)

小児外科学

小児外科は現在スタッフ4名で診療にあたっています。成人においては診療科が細分化されていますが、小児外科の守備範囲は広く、頭頸部、胸部、腹部、体表など子供たちをトータルケアしており、さまざまな疾患の治療を行っています。当科で扱う疾患の多くは先天性の良性疾患であり、術後の機能改善が重要になります。低侵襲かつ良好な術後機能獲得のために、患者さん個々に応じた術式を検討し、胸腔鏡や腹腔鏡手術も積極的に取り入れています。また、周産期女性診療科や小児科と協力しながら新生児外科疾患をいつでも受け入れ可能な体制を整えています。少子化の現代において、成長発達していく子供たちの特性を理解した手術および周術期管理が必要であり、子供たちを支える、ご両親の気持ちにも寄り添える医療を提供することを心がけています。

高松赤十字病院では久保先生が精力的に外来や手術に取り組まれています。

研究面では、基礎研究としては大学院生の形見先生を中心に「精巣捻転モデルにおける虚血再灌流の与える影響」をテーマとしています。また、臨床研究では胃食道逆流症などの消化管運動異常や腸内細菌叢の研究にも取り組んでおり、分子微生物学教室と共同研究を行っています。

香川県の周産期～小児医療に貢献できるよう、スタッフの質を向上させ、最新かつ最善の医療を提供していきたい

と考えています。

(田中 記)

心臓血管外科学

旧第1外科から消化器外科と心臓血管外科に分かれて早13年となります。堀井教授を先頭に、成人の心臓・血管疾患に関する治療を行っています。冠動脈疾患では単独バイパスのほとんどは人工心臓を使用せずに心拍動下に行っており、僧帽弁膜症に対しては弁形成術を積極的に行っています。重症心不全については左室形成も含めた複合手術で良好な成績をおさめています。大動脈疾患では低侵襲なステントグラフト内挿術も適応があれば行っています。今後は経カテーテル大動脈弁置換術や補助人工心臓の植え込み施設の認可を目指して準備中です。今年からは堀井・山下・北本に加え阪本・細谷が増員となり(中川は善通寺のこどもとおとなの医療センターで研修中)、外科系ローテーションの先生も加え人数的にもようやく余裕が出てきました。まだまだ皆様の期待には十分応えられていない状況ですが、今後とも御指導・御鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。(山下 記)

消化器外科学

当科は「患者さん中心の全人的医療の提供」を理念とし、手術を柱とした安全かつ高度な医療を提供しています。日本消化器外科学会の指定施設であることに加え、日本肝胆膵外科学会の高度技能専門医修練施設A(全国で約120施設、香川県で唯一)にも認定され、高難度肝胆膵外科手術の安全性と長期成績は高く評価されています。中でも難治性の膵癌に対しては、独自の術前化学放射線治療を加えることで成績は格段に向上しており、世界に向けて情報発信を続けています。また消化器癌、肝胆膵疾患などに対して、内視鏡を使った低侵襲手術(腹腔鏡・胸腔鏡手術、ロボット手術)にも精力的に取り組んでいます。移植医療としては四国唯一の膵臓移植実施施設(全国18施設)に認定されており、1型糖尿病患者さんに対する膵臓移植を行っています(過去8例に施行)。毎年素晴らしい新入局員(今年度5名)が加わり、教室は常に活気に溢れています。若手からベテランスタッフまで多数の手術を受け持ちながら、アートとサイエンスの両輪で力強く前進しています。また、本年6月に日本肝胆膵外科学会を当教室が主催し、高松で多くの皆様からご支援をいただきながら盛大に開催することができました。今後も各疾患に対する治療成績の向上を目指し、患者さんのお力になれるようにスタッフ全員が熱意と誠意を持って診療を行ってまいります。今後とも御指導を何卒宜しくお願い致します。(大島 記)

呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室は横見瀬裕保教授が就任して21年目を迎えました。今年度は長年待ち望んでいた乳腺内分泌外科へ倉石医師(卒後3年)が加わってくれました。また呼吸器外科では高松市立みんなの病院より吉田医師(卒後11年目)が、国内留

学より藤原医師(卒後12年目)が帰ってこられて、呼吸器外科10名+乳腺内分泌外科3名体制となりました。若手が増えたことで教室全体の雰囲気もさらに良くなっています。

臨床において、年間手術件数は350例を超え、年間肺腫瘍手術件数も150程度あり、四国トップクラスを維持しております。今年からは肺癌や縦隔腫瘍に対する新たな手術方法として注目を集めている「da Vinci®」を用いたロボット支援手術の導入を始めます。また呼吸器内科はもちろん、放射線科、臨床病理部との合同カンファレンスを定期的に行い、様々な症例に対して最適な治療を行うために、積極的に意見交換をおこなっております。当教室では県内はもちろん県外にも関連施設(高松市立みんなの病院、坂出市立病院、高知医療センター、明和病院等)が多数あり、20名近い医局員がそれぞれ活躍しております。

研究においては7名の大学院生を中心に肺癌の遺伝子解析とそれを基にした新たな治療法の開発、メディカルガスを用いた長期肺保存と肺移植、ICG蛍光カメラを用いた手術手技の開発、気管や肺の再生医療等を研究テーマとし、日々熱意をもって取り組んでおります。

当教室の合言葉は横見瀬教授就任時より一貫して、「art, heart, science」です。すなわち自分の最も愛する人に行う治療をアート(卓越した技術)、ハート(患者さんの身になって)、サイエンス(科学的根拠)に基づいて、すべての患者さんに行うことです。医局員全員がその言葉を胸に、これからの最新で最適な治療を患者さんへ提供できるよう取り組んでまいります。これからの呼吸器・乳腺内分泌外科をよろしくお願いいたします。(加藤 記)

整形外科

整形外科は山本哲司教授が就任後15年目を迎えました。4月からは卒後3年目の後期研修医として慈氏、末光、東田の3名の若き優秀な医師が入局してわれわれの仲間に加わってくれました。主治医業務を分担しながら手術、病棟、検討会といった日々の業務をこなしてくれていますが、今後学術活動でも学会発表や講演、論文作成などを通じて、活躍の場を広げてもらう予定です。昨今整形外科には手術件数を含めた診療実績が強く求められてきていますが、着実にそのニーズに応えつつ、若手育成や研究活動も含めた全体的なレベルアップを目指して日々研鑽を積んでおります。

運動器診療に携わる整形外科はスポーツ活動とも親和性が高く、日本整形外科学会自体が毎年学会期間中に医局対抗の野球、サッカー、バスケの全国大会を開催しています。これら種目の結果は会場のかかり目立つ場所に貼り出されますし、関心も非常に高く、大きな大学は勝つために元プロ選手をコーチに雇ったり、仕事を休んで合宿を行ったりするほどの力の入れようです。当科の野球チームは4年連続で中四国予選を勝ち上がって本線に出場しており、これだけでも素晴らしいのですが、今年はずいぶん本戦で全国3位という偉業を達成しました。これは、本戦出場チームの中では最も少人数、高齢というハンデを物ともせず、負傷者にはキシロカイン注射を乱用しながら戦い抜い

て得た名誉であり、医局全体の士気もかなり高まりました。サッカー部も後に続けるように、日々の業務の合間を縫って努力を重ねています。一般的には、これらのスポーツ活動は遊びと捕られるかもしれませんが、体育会的要素が強い整形外科では完全に業務の一環だと認識されています。仕事も遊びも全力で行う活気を漲らせてこれからも業務を推進したいと考えておりますので、ご支援の程よろしくお願いたします。(真柴 記)

形成外科学

2017年4月に永竿智久教授が就任して3年目を迎えています。今年の当教室においての一番嬉しいニュースは新しい仲間として三柳先生が増えたことです。若い新しい刺激を受けてスタッフ一同より一層精進しなくてはと、感じております。

臨床においては、永竿教授の専門である漏斗胸に対する胸郭形成術が着実に増えております。小児から成人している方まで、胸郭に悩まれている患者様がいればぜひ一度相談いただければ幸いです。また、頭頸部再建、耳介形成術を専門とする濱本有裕(助教)、母斑血管腫治療の中心となっている木暮鉄邦(助教)、唇顎口蓋裂など先天異常を専門とする玉井求宜(病院助教)、専門医を取得し臨床の守備範囲を徐々に広げている松本絵里奈(医員)、手外科や外傷を中心にマイペースにしっかり仕事をこなす工藤博雄(医員)で診療にあたっています。

患者様のQOLを重視し、患者様に寄り添う医療を提供できるよう努力していきます。今後とも形成外科教室をよろしくお願致します。(玉井 記)

泌尿器科学

泌尿器科教室は、昨年7月に3代目教授として香川大学出身かつ香川県出身の杉元幹史先生が就任されました。杉元先生の強力なリーダーシップのもと患者さんを中心のQOLを重視した、逃げない・寄り添う医療を目指し医局員一同日々頑張っております。現在、大学にいる教室員はスタッフ8名、大学院生3名の11名です。少数ながら、臨床・教育・研究の3本柱を一つもおろそかにすることのないよう努力しております。医局の大きなニュースとしては、小橋口先生が入局されたことです。杉元教授になって初めての入局者としてこれからの活躍を期待しています。小橋口先生は広島出身、香川大学卒業の女性医師です。引き続き毎年若い先生が入局していただけるよう医局の魅力を高めていきます。また、今後社会的なニーズがますます高まるのが予想される泌尿器科医を目指す学生や研修医を増やすべく学内はもとより、県外で研修を行っている先生に対しても積極的にリクルート活動も続けて参ります。今後とも泌尿器科学教室をよろしくお願いたします。(常森 記)

眼科学

2018年9月より4代目の教授として鈴間潔先生が着任さ

れました。教授不在期間1年半と落ち着かない不安定な状態がかなり長く続きましたが、教授が着任されてから教室内がまとまって活気づいてきたように思います。

現在、眼科学教室は鈴間教授以下、准教授1名、助教4名、病院助教3名、医員8名、視能訓練士8名(2名育休中)で構成され、また、外来クラークが3名おり、診療・研究・教育を行っています。専門外来は、鈴間潔(教授)、藤田智純(助教)、中野裕貴(病院助教)が網膜・硝子体外来を、白神千恵子(准教授)、山下彩奈(助教)、逢坂理恵(病院助教)、高砂縁(病院助教)が黄斑外来を、新田恵里(助教)、島崎武兎(医員)が緑内障外来を、鈴間潔(教授)、逢坂理恵(病院助教)、小山雄太(医員)が眼循環外来を、三好由希子(医員)が斜視・弱視外来を、また村田晶子(診療協力医師)が涙道外来を行い、それぞれ診療にあたっています。

今年は2名の入局がありました。ここ何年かは出入りが激しく、なかなか人手不足の解消にはつながらないのがつらいところでしたが、学生の教育・リクルート活動を頑張った努力が実りつつあるのか今年は前期研修で眼科を選択した研修医が例年よりも増え、外から病院見学に来てくれる研修医も例年よりも増えています。この調子で人手が潤うことを祈るばかりです。(山下 記)

耳鼻咽喉科学

当教室にとって1年間で一番うれしい出来事は、富岡史行先生が新しく仲間が増えたことです。岡山県出身で香川大学卒業、後期研修3年目は香川大学で研修を開始しています。4月入局直後より引きの強さを感じずにはいられない研修内容ですが、頼もしく育ってくれそうです。大学病院内に限らず香川県内外の病院でお世話になる事と思えます。同窓会の先生方には温かくご指導いただきますようどうかよろしくお願いたします。耳鼻咽喉科・頭頸部外科では、他大学とも協力し香川県内の専門研修指定病院を包括した専門プログラムを運用しています。少人数の医局だからこそできる、「広く、深い」研修プログラムを作成し、質の高い医療人を育てることを目標としています。

診療においては、甲状腺の内視鏡手術Video-Assisted Neck Surgery(VANS法)を導入しました。鎖骨外側下からアクセスし、皮膚を吊り上げて操作します。創部は衣類に隠れ整容面でも満足いく手術となります。適応など制限もありますが、患者様の希望等ありましたら紹介をお願いします。星川教授の専門分野である頭頸部腫瘍(経口腔的腫瘍切除や悪性腫瘍切除術など)だけでなく、耳疾患(鼓室形成術や内視鏡下耳科手術、人工内耳など)、鼻疾患(舌下免疫療法、内視鏡下鼻内副鼻腔手術、ナビゲーション下手術など)、音声嚥下疾患(ボトックス注入、音声改善手術、誤嚥防止手術など)など、各専門分野でより充実した医療を提供できるよう医局員全員で協力しております。貴重な症例をご紹介いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。より良い医療を目指して邁進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

(印藤 記)

放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で12年目となりました。

今年度4月に則兼先生がユタ州のユタ大学“Department of Radiology & Imaging Science”に留学されています。北米放射線学会(RSNA)では准教授の山本先生が昨年に引き続き2年連続でCertificate of Meritを受賞しました。

若手から中堅の先生も順調に成長し、三田村先生が昨年度「放射線診断専門医」及び「IVR専門医」を無事取得し活躍されています。また、高見先生が博士号を取得し、大学院を卒業しました。卒業後は臨床、研究方面共に頑張っております。

当科の「放射線診断」という仕事は今までは残念ながら一般の方にはあまり知られておりませんでした。今年は放射線診断医をテーマにしたドラマが放映されるなど、メディアでみかける機会が多くなりました。多岐に渡り医療を支える放射線医学の仕事が多少なりとも世間に認知されるようになったのではないかと思います。当科ではより一層、「患者さんに寄り添う放射線診断」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたくと思っております。(室田 記)

麻酔学

私たちの麻酔学教室は、白神豪太郎教授が就任して12年目を迎えました。現在、周術期の全身管理、集中治療、ペインクリニックや緩和医療と幅広い分野で、多くの医局員が診療、教育、研究に励んでいます。

12年連続して専攻医を医局に迎えておりましたが、今年は途絶えることとなり痛恨の極みとなりました。医局員一同が麻酔学の魅力をより一層伝え、働きやすい環境を整えることが必要と考えております。

昨年度は、新たに滝宮総合病院へ麻酔科医を派遣することになり、武田先生が赴任されました。岡部先生は医学博士を、また石橋先生、西部先生は麻酔科専門医、伊東先生はペインクリニック専門医を取得され、先生方の一層の活躍に期待しております。さらに多くの医局員が、専門医や学位の取得、優秀な卒業生の輩出に向けて日々努力しております。

麻酔管理件数、集中治療室入室患者数、ペインクリニック外来患者数など順調に増え、関連病院も増加しております。

来年度は、白神教授が会長となり、日本麻酔科学会中国・四国地方会を開催する予定となっております。

今後も教室として社会的期待に応え責任を全うすべく精進してまいります。同窓会の先生方におかれましてはますますのご指導・ご鞭撻のほどよろしく願いたします。

(澤登 記)

救急災害医学

救命救急センターでは4月から、奄美大島の鹿児島県立大島病院から中村先生を迎え、引き続き脳神経外科から宍

戸先生、松村先生、循環器内科から横山先生が長期在籍いただき、現在12名(うち1名は産休中)の救急専属医と各科から応援医師を派遣いただき、ICU10床、センター12床の運用で診療を行っております。

当科で特に力を入れているNeurocritical careの領域では、今年はこれまで行なってきた様々な治療方針をプロトコル化し、教育の充実や救命センターとしての治療の標準化を図っております。

また、集中治療領域の各分野の研究も岡崎先生をはじめ精力的に行っており、県内外から広く大学院生を受け入れております。

臨床・研究以外には、県内の救急医療のメディカルコントロール会議に参加しており、他病院の先生方とプロトコルを改訂したり、県内の救急医療・災害医療の問題点を改善するべく尽力しております。

2021年には集中治療学会学術集会の主催を控え、臨床と研究、ハード面とソフト面、院内だけでなく院外、と体制をさらに充実させていけるよう精進していきたいと考えています。(切詰 記)

歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅 実教授が就任後5年目を迎えました。今年度から日本矯正歯科学会認定医の塩谷園が新しく入局し、主に先天性疾患などの保険診療が適応となる症例について矯正歯科診療を行うことになりました。また今年度は本学の歯科医師臨床研修プログラムを選択した合田、松尾、宮脇の3人が研修を受けています。後期研修プログラム目標である日本口腔外科学会認定医を4名の医局員が取得しました。関連病院のかがわ総合リハビリテーション病院歯科には、南、塚本が常勤で、障がい児・者に対し専門的で安心できる歯科医療を提供しています。さらに新しく独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターに非常勤で主に入院患者を中心に歯科医療を提供するようになりました。現在大学院生は8名で、歯エナメル質でのEPR放射線被ばく線量測定、希少糖による口腔細菌への影響、骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の臨床研究等を行っています。

従来の口腔外科疾患に加え、がん患者等の周術期口腔機能管理、歯科インプラント、歯の内視鏡下およびマイクロスコープを使用した歯根端切除術等の個々に応じた最善の医療を提供しています。(大林 記)

内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学

内分泌代謝内科は村尾孝児教授を中心として学内では9名のスタッフで一致団結して臨床、研究、教育に励んでいます。今年は幸いにも4名の新入局員の先生方を迎えることができ、医局内は活気に溢れています。診療面では、2018年度の外来患者数が1万人を突破し、入院患者数も年々増加しております。特に内分泌領域における患者数は中四国でもトップクラスで、これもひとえにご紹介を頂きます先生方のおかげであり、この場をお借りして御礼申

上げます。対外的には医療ICTによる糖尿病地域連携パスの作成、香川県歯科医師会との医科歯科連携事業の強化、KDDI社との「うながし学」による生活習慣病改善プロジェクト、かがわ糖尿病療養指導士育成事業、香川県との糖尿病重症化予防事業、国際希少糖教育研究機構との希少糖臨床応用への取り組みなど多岐にわたるプロジェクトを展開しております。2020年には第58回日本糖尿病学会中国四国地方会（会長：村尾孝兎）の開催や、2021年に第17回日本臨床検査医学会中国・四国支部総会（会長：井町仁美）の主催を賜っており、医局員一同、皆様のご参加を心待ちにしながら準備を進めております。これからも皆様から信頼される内分泌代謝領域の診療を行い、香川県の内分泌代謝学の発展に貢献できるよう精進してまいりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。（福長 記）

臨床腫瘍学

臨床腫瘍学講座は、2015年2月に新設され、同年4月より臓器横断的に、がんの集学的治療（手術・抗腫剤・放射線治療など）の実施、診療科間のがん診療連携、がん治療に係る医療機関等との連携及びその推進、がん予防・診療についての研修及び啓発、支持療法、緩和ケアの推進を行っております。特に、消化器がんや、頭頸部がん、稀少がん（肉腫、GIST、神経内分泌腫瘍など）では、先進的な診断・治療を行っております。また、いよいよ保険適応となる、がんゲノム医療の準備も進めており、最適な治療薬をいち早く患者さんに提供するための医療の実現に取り組んでいるところです。さらに、化学療法自体の作用機序や漢方薬を用いた支持療法、緩和医療に関する基礎データと臨床データとのトランスレーショナルな研究にも引き続き取り組んでいます。

現在、辻教授の強力な指導の下、国内学会・国際学会にも積極的に演題投稿・発表を行っております。昨年度は、奥山先生が欧州臨床腫瘍学会で神経内分泌腫瘍に関する第二相試験の結果について最新のデータを発表されました。大北先生は肉腫・希少癌・頭頸部がんなど幅広く診療され、大腸癌では多施設共同臨床試験の事務局として新規治療の開発にも取り組まれています。村上先生は、緩和ケアチームやペインコントロールで益々積極的に緩和治療を実践され、患者様やスタッフにとってなくてはならない存在です。最後に今年度は、なんとと言っても待望の大型新入局者である羽床琴音先生を迎えることが出来ました。腫瘍内科一期生としてこれからのがん診療の発展に大活躍されることと大いに期待しております。教室のモチベーションもさらにパワーアップしているところです。現在、医局員は、辻教授以下6名になりましたが、千両役者ぞろいと自負しております。引き続きより質の高い次世代のがん診療と研究、教育のために研鑽と挑戦をしてゆく所存ですので、皆様におかれましては益々のご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。（西内 記）

総合診療医学

総合診療医学では4人のスタッフがそれぞれのSubspecialty専門領域（循環器、消化器、脳神経内科）を生かしながら、大学病院の総合診療に従事しています。発熱、全身倦怠感、意識障害など受診時にはすぐに診断がつかない患者さんを対象として診断、治療にあたっています。大学病院は全診療科が専門医の集団ですが、その中でこそ総合診療的な診療が必要な場合もあり、当科が果たすべき役割と考えています。

2018年から新専門医制度が開始され、総合診療専門医は総合診療そのものが専門性であるとされています。本教室では「香川大学総合診療専門研修プログラム」を作成し、大学病院と香川県内の地域の病院とをローテーションしながら総合診療専門医資格を取得できるプログラムを用意しています。研究面では各スタッフが専門領域に基づく研究を行い学会発表、論文執筆を行っております。

診療、教育、研究面での本教室の役割を果たせるよう努力してまいりますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。（舩形 記）

放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。治療専門医・指導医として柴田教授・高橋助教が常勤し、専攻医として穴田医員・西出医員が研鑽を積んでいます。

臨床面では、2014年度に導入した治療技術の高度化に対応した機器を用いて、強度変調放射線治療（IMRT）・画像誘導放射線治療（IGRT）等に積極的に取り組み、前立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍・術後子宮頸癌・一部の肺癌に対するIMRTの実績を増やしています。通常照射・ピンポイントの定位照射・小線源治療等とあわせて、年間450例前後の治療を行い、診療報酬の増収を達成しています。

研究面では、2名のがんプロ大学院生（木下〔子宮頸癌〕・片山〔医学物理〕）が課題に取り組んでいます。また、科研費にも採択され、国内外の学会や英文論文で成果をコンスタントに発表しています。

皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

（高橋 記）

医療情報学

医療情報学の研究室は、病院部署の医療情報部として行う業務と、研究室として行う教育・研究の二つを担っています。

業務としては、2018年1月に電子カルテの入れ替えを行い、色々と新しいことに挑戦しました。しかし、読影レポートなどの未読問題や、データの信頼性を保つためのユーザー教育など、課題はまだあり、検討を継続しています。

また、厚生省の薬剤疫学用の解析システムであるMID-NETが昨年度から本格運用に入り、協力病院の当院でも、データ解析の件数が多くなっています。この過程で得たノウハウや人工知能の手法を用いて、ビッグデータ処理に関する研究を行っています。

昨年、私が兼任している臨床研究支援センターの、臨床研究法施行に対応した人員強化の予定を書きましたが、専任の教員が1名配置され、4月から同法に関する運用管理の業務に従事しています。(横井 記)

薬剤学

薬剤学教室では、安全で安心な薬物療法の支援を行うために様々なテーマで研究を行っています。

抗がん剤の適正使用のための研究開発もその一つで、今回はその中でも投与量が適正か否かのチェックについての取り組みをご紹介します。

がん化学療法を施行する上で患者さんの腎機能は、治療のための抗がん剤の量を決定する重要な因子の一つです。そこで、電子カルテ内の腎機能検査値と医薬品の特性での禁忌情報をエクセルでマッチさせ不適の場合に薬剤部へメールでアラートを発信するシステムを構築しました。なお、本システム開発においては臨床研究支援センター國方淳助教の多大なるご支援によることを感謝致します。

医薬品は診療を行う上で重要なツールの一つで薬本来の治療効果を十分に発揮するためには、医薬品の特性について学ぶことがたいへん重要です。また、適正な薬物療法が行うことが出来るように教育支援を行ってまいりますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。(芳地 記)

健康科学

讃樹會会員の皆様には平素より大変お世話になっております。私ども健康科学は昨年度より所属が看護学科から医学科健康科学系に変更となりましたが、業務自体は従来とほぼ変更なく、看護学科の学部および大学院修士課程の教育と、医学科の統合講義や外来診療および回診などにも参加させていただいております。看護学科におきましては看護師および保健師課程共にほぼ100%に近い国家試験の合格

率で、県内外に看護師、保健師、養護教諭を送り出しております。また看護学科修士課程におきましては、来年度から大学院に助産師課程を開設し、保健師課程も開設準備中で、将来的には博士課程の新設を目指しております。

研究面におきましては、私の現在の研究テーマは、医学科との共同研究として非侵襲的脳刺激法を用いた新しい神経機能回復訓練法の開発と、医工連携による神経疾患患者に対する運転技術訓練法の開発です。筒井准教授は経胃栄養患者における誤嚥性肺炎の原因に関する基礎研究等を行なっています。

以上、微力ではございますが、教育、研究、診療におきまして皆様のお役に立てるように頑張っていきたいと思っております。(峠 記)

学会開催報告

2018年2月10日～11日

《第30回日本老年麻酔学会—日本老年麻酔学会史上、最も“cool”な学会—》

香川大学医学部麻酔学講座

伊東 祥子 (平成21年卒・24期生)

2018年2月10日(土)、11日(日)に琴平町において第30回日本老年麻酔学会を開催しました。「超高齢社会における麻酔科医の役割」というテーマのもと、それぞれ2つのシンポジウム、特別講演、共催セミナーを開催しました。シンポジウム1つめは、「超高齢社会における高齢麻酔科医の役割」として、小栗顕二先生をはじめ3名の先生方にご経験と若手への激励の言葉をいただきました。2つめは、「超高齢社会における麻酔科医の役割と多職種連携」として、4施設からそれぞれの取り組みについてご講演いただきました。特別講演1つめは、東京大学秋下雅弘先生から高齢者と多剤併用について、2つめは国立長寿研究センター荒井秀典先生から高齢者のサルコペニアやフレイルについて、ご講演をいただきました。一般演題も50題と過去最多のご応募をいただき、各セッションでは熱心な討議がありました。

学術集会終了後には、サテライトセミナー「さぬき超音波ガイド下神経ブロックハンズオンセミナー」、「専門医共通講習」を開催し、多数ご参加いただきました。

寒波到来により非常に寒い2日間でしたが、218名と過去最多のご参加をいただきました。主会場は国の登録有形文化財である琴平町公会堂で、会場も非常に



“cool”な中、参加者の皆さまには大変“cool”な議論をしていただきました。

教室員の手作りで不行き届きの点も多数ありましたが、参加者のみなさまには温かいお言葉を頂戴し、教室員一同お礼を申し上げます。なお、本学会の開催にあたり、讃樹會をはじめ、多数の施設、企業の皆さまからご協賛いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。



2018年7月14日

《第21回 日本光機能イメージング学会学術集会》

香川大学小児科学講座

日下 隆 (平成3年卒・6期生)

讃樹會会員の皆様におかれましては、平素より大変お世話になっております。

2018年7月14日(土)に星陵会館(東京都千代田区永田町2-16-2)にて、第21回日本光機能イメージング学会学術集会を開催いたしました。「周産期医療における光イメージングの未来」を会のメインテーマとし、特別講演2題、指定講演1題、シンポジウム、ポスター14演題の発表が行われました。会長講演



として「周産期における脳酸素代謝の特異性」の演題名で講演させて頂き、特別講演では浜松医科大学産婦人科学講座の金山尚裕先生より「近赤外線を用いた周産期管理」、鹿児島大学救急・集中治療医学分野の垣花泰之先生より「近赤外線分光法の新たな可能性を探る - 危機的状況での必須な情報とは? -」と題してご講演を頂きました。またシンポジウムでは、周産期領域におけるNIRS研究に関する研究をおこなってお

られる5人の先生方に発表をして頂きました。これら特別講演、シンポジウム及びその他の口演発表、ポスター発表では大変活発な討論が行われました。

本会を通して、ご参加頂いた皆様が多く意見交換を行い、新たな知見を得られたことは、周産期医療の光イメージングの未来にとって大いに有意義な学術集会であったと考えます。今後とも引き続き、ご支援をよろしくお願いいたします。

2018年11月24日

《第30回腎とフリーラジカル研究会》

香川大学薬理学

西山 成 (平成5年卒・8期生)

讃樹會の皆様におかれましては、平素より大変お世話になっております。

2018年11月24日(土)に高松シンボルトワーオフィスサポートセンターにおきまして、讃樹會のサポートのもと、第30回腎とフリーラジカル研究会を開催いたしました。

本会はテーマを「腎臓病克服に向けた最新情報の発信」と掲げ、特別講演2題、一般演題14題の発表が行われました。特別講演Ⅰとして岡山大学大学院医歯薬学総合研究科薬理学分野 西堀正洋教授より「敗血症における血液-血管内皮細胞インターフェイスの病態解析に基づく早期診断と治療法の提案」、特別講演Ⅱ

として香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科学 南野哲男教授より「基礎と臨床の往還 - 虚血性心疾患に対する新たな治療法・予防法の開発」を講演していただきました。特別講演に加え、多数の一般演題でも大変活発な討論も行われました。

本会で最新の知見が発表されましたことは、ご参加された皆様の知識の向上、ならびに社会への貢献へとつながる学術活動であったことを確信しております。引き続き社会貢献を視野に入れた研究・教育活動を続けてまいり所存ですので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。



西堀先生



南野先生



一般演題発表の様子

Album / 34期生

祝卒業

—平成31年3月24日—





寛善行学長



横見瀬裕保病院長



謝恩会実行委員長
杭ノ瀬慶彦君



上田夏生医学部長



34期卒業生が選ぶ栄えある
“Outstanding Teacher”は、
坂東修二先生に贈呈されました。



同窓会長代理の安田真之先生から
お祝いの卒業記念品目録の贈呈。



編集後記

本年度より、小児科の安田真之先生の後任で広報委員を仰せつかりました消化器神経内科の谷丈二です。今年には元号が平成から令和となり、気づくと令和に慣れていきます。元号には日本の歴史・文化を継承していく力があると改めて実感します。この会報が香川大学医学部の歴史や文化を次世代に継承されていくように研鑽してまいります。『令和』の意味ですが、英BBCが「order and harmony」と英訳したという報道に普通はそう訳すだろうなと思いつつ、「美しい」とか「良い」という意味が「令」にはあると知り、万葉集の梅の歌の序文という典拠を考えれば、「beauty and harmony」辺りが正解かなと思った次第です。この区切りの新年度に同窓生教授就任のご挨拶を、腫瘍病理学の松田陽子先生と周産期学婦人科学の金西賢治先生よりいただきました。また、今井田克己先生や秦利之先生の教授退官のご挨拶もいただきました。今後も我々をご指導いただきたく思います。新しい年号とともに、讃樹會としましても明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、早速ですが明るい話題として薬理学西山教授のJAXAとの共同研究と同窓の清元秀泰先生が姫路市長に就任というNewsが飛び込んできました。両先生からご寄稿頂き、香川大学医学部卒業生が新たなステージに入ったことを感じさせるものでした。

今回本号では2つの特集があり、1つは病院再開発整備事業の完了についてで、手術棟の完成、東病棟・外来ホールが完成し、機能的となりbeauty and harmonyを感じさせるものです。もう1つは「平成元年に生まれて」として、3名の先生方にご寄稿いただきました。3年目となりました教室便りですが、各教室の旬を香川県内外の会員の皆様と共有できればと思っておりますので、今後ともご協力いただけますようよろしくお願いいたします。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくご意見申し上げます。

広報局長 谷 丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からのお知らせ

【連絡・問い合わせ先】

TEL 087-840-2291

Email: dousou@med.kagawa-u.ac.jp

<https://dousoukai.site/sanjukai/>

◆本年の香川大学医学部医学部祭の日程は次の通りです。

令和元年10月11日（金）～13日（日）

◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。

◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人2000円の支援がありますので是非ご利用下さい。（助成カウント条件は、卒後15年まで且つ会費を納入いただいている正会員です。）

◆国外留学助成金の申込は年2回です。直近の締切は本年9月末日です。次は来年3月末日となります。

◆研究助成金/研究奨励金の申込締切は毎年4月末日です。ふるってご応募下さい。

訃報

正会員

杉田 英樹先生（平成元年卒・4期生）

2019年7月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。